
グランディール

石室悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グランディール

【Zコード】

Z0687C

【作者名】

石室悠

【あらすじ】

天才的才能を持ちながら、機械の普及のせいでの職に就けず、食いつなぐためにアルバイト生活をしている魔術師コーデュ。ある日コーデュは、額に公告を貼り付けた男に出会い、彼に興味を持ち始める。何しろ彼は、とんでもない守銭奴だった。

始まりの前に

「コーデュ、コーデュ……」

友人の名をしきりに呼びながら、泣きじゃくる少女の姿が有つた。年の頃は、一五、六といったところだろうか。質素なワンピースを着た、黒髪の少女。彼女は、部屋の隅にしゃがみこんで、泣き続いている。

部屋は小さいが、粗末と言つほど酷くもない。机と椅子、ベッドが各々一つ。窓からは雪に覆われた雄大な山々が顔を覗かせていた。暖炉は静かに火を熾し、部屋を暖めている。

この部屋で彼女は、コーデュという同い年の少女と同居していた。コーデュは少女のすぐ側で、同じようにしゃがみこんでいた。金髪で、端正な顔立ちをしている。同じような格好をしていたが、泣きじやぐる少女とは正反対に、コーデュは無表情だった。

「コーデュ、どうしてこうなのかしら？　どうして……」

「カティーナ……」

「親が居ないって、そんなに悪い事なの？　コーデュ……」

少女……カティーナは、手の中で握り締めた紙を見る。それはカティーナの目指した、国立魔術研究所からの通知で、一言「不合格」と書かれていた。

カティーナとコーデュは、孤児だつた。二人は物心付く前から、この孤児院の一室で共に暮らしている。

時勢が良いので、孤児だからといって、特別苦しい生活をする必要は無かつた。魔術を伝統的に大事にする国柄もあるのだろう。魔力を持つて生まれて来た彼女らの世話は、孤児院が見てくれた。虐待なども無く、コーデュもカティーナも、健やかに今日まで生きてきた。

けれど、差別や迫害を感じなかつたのは、孤児院の中に居たからで。

彼女達は一五歳を迎えて、社会に飛び出そうとした。その矢先の出来事だった。

二人はどうやらも、田舎す場所に「こと」とく入れなかつた。それも、実力の及ばないとこる……履歴書で、ふるい落とされた。

彼女達には、両親を証明する手立てが無かつた。ただそれだけの理由で。

「コーデュ……私、もうダメ。もう、頑張れない……」

「カティーナ……」

「親がこんなに憎いのつて、初めてよ。私の一五年間を、見た事も無い両親が棒に振つたなんて。信じられない。もう嫌。もうダメよ……」

カティーナは「不合格」と書かれた紙を破り捨て、そして俯いた。ひとしきり泣いて、もう涙も出なくなつっていた。

そんなカティーナを見て、コーデュは静かに言う。
「カティーナ。……ちょっと前に、今のカティーナみたいだつた私に、貴方、何て言つたか覚えてる?」

「……?」

「『『コーデュ、負けちゃダメ。孤児だつて偏見をするような人達、こつちから願い下げよ。諦めちゃダメ。諦めたら、何もかも終わりよ』つて」

「……」

「コーデュの言葉に、カティーナは苦笑いを浮かべる。

「偉そうな事、言つちやつたね」

「でも私、カティーナの言つてる事、間違つてるとは思わない。……」

カティーナ。私、考えたんだけど

「何?」

「孤児院を、出ようと思つの」

その言葉に、カティーナは目を丸くした。

「出るつて、どうやつて。コーデュだつて仕事、全部落ちたんでしょ?」

「正規の仕事はね。でも、アルバイトなら残つてるもの。生きてい
きようなんて、いくらでもあるわ」

「でも、夢はどうするの。貴方、魔術師として生きていって……
「夢の叶え方って、一つじゃないと思うの。研究所に入る事だけが、
魔術師の道じゃないわ」

「コーデュはそう言って、カティーナを見る。

「カティーナ。確かに私達は孤児よ。偏見も受けて、試験に落ちた
わ。理不尽よ。……でも、理不尽だつて俯いてても、何も変わらな
いじゃない」

「…………」

「それに私達、本当に境遇だけで差別されたのかしら？ 私は魔術
一筋に生きてきたから、常識が無いと自分でも思つてゐるの。……も
し、私が孤児じやなかつたとして、本当にそれだけで、私は目指し
ていた場所に入れたのかな、って」

もしそれだけじやなかつたら、結局同じ。私、両親が居ないから、
つて言い訳をして、境遇に甘えてるだけよね？

「コーデュは天井を仰いで言つ。

「私、孤児院を出て、社会を知つてみようと思つた。何だかんだ言
つて私達、ずっと保護されてきたでしょ？ ……ここを出てもう
一度、自分を鍛え直して……それで、それでもダメなら、理不尽を
嘆こうと思うの。でも、今は嘆きたくない。諦めたくない」

「…………」

「…………カティーナは、どうする？」

「コーデュが尋ねると、カティーナはしばらへ悩んで、答えた。

「…………なんだか、『コーデュの言つてる事も、正しい気がする……
でも、…………そうね、私達、一緒に居たら、お互に甘えちゃいそ？
…………お別れ、しなきゃいけないと想つ」

「そうね…………」

「一〇年以上、一緒に暮らして來たけれど。

これからは、違う道を歩かなくてはいけない。そうする事が、お

互い成長するために必要なのだ。

カティーナはともかく、コーデュは既に決心しているようだった。

そんなコーデュを見て、カティーナも「うん」と頷く。

「判つた。私も、ここを出てみる。それで、どっちが早く夢を掴めるか、競争しましょ」

「そうね、カティーナ」

「あ、でも、音信不通は寂しいもんね。ここを経由して、文通しましょう。お互いの現状を報告し合しながら……頑張りつ」

「……うん。……頑張ろう、カティーナ」

少女達はそう言って、そして笑い合つた。

数日の後、彼女らはそれぞれ、長年過ごしてきた孤児院を出る事になる。

二人は文通を続けながらも、夢を掴むまでお互に会わない事を約束した。

いつか、境遇を乗り越え、成功した時に。

そして今。

一人が約束を交わした日から、既に四年が経過していた。

ここに、コンデュと名付けられた大陸が在る。大陸には現在、四つの王国が存在する。

北西に、農業と工芸品の王国アルキーシュ。北東に、機械と鉱山の王国キヤドウ。南西に、魔術の王国メルティーナ。南東に、酪農と漁業の王国クレンセオス。

四つの王国は互いに争い等も無く、一口に言えば平和な時代を迎えていた。

しかし、今から五年程前より普及し始めた、北東の王国キヤドウの「機械」及び「科学」なる物が、これまであつた伝統的技術「魔術」の必要性を無くしていた。

「魔術」は古くから「魔力」を持つて生まれた人間だけが使えるもので、それが身分格差等を生み出していた。だが、それが揺らぎ、魔術でしか出来なかつた事が、今や続々と機械化している。

これまで「魔術師」と呼ばれる人々は、そうでない人々の上に君臨していたが、「機械」の台頭で立場は逆転。「魔術師」達は地位も職も失つてしまつた。

さらに「機械」や「科学」は、長年大陸に住んでいた「魔族」、いわゆるモンスターを駆逐した。現在も化け猫だの山男だの、そういう類は居るが、人類にとって極めて有害なモンスターは既に滅んでいる。

また「機械」は、下克上の時代を作り出し、王はその主権を失い、敬われるが何事も成さぬ、ただの金持ちへと変貌していた。

どこの国もそうであるのと同じで、アルキーシュも、そんな国となつてている。

元々アルキーシュは、美術工芸品と農耕を主な産業としていた王国だった。しかし近年、機械の参入によつて工芸品もその多くが、

魔術師や職人の手作業を必要としなくなつてきている。

そして人民は特に意味も無く「国王陛下」と見た事も無い老人を呼び、その子らを「王子様」と妄想を込めて呼んでいた。

人民政府なるものが誕生し、国の治安はそちらが守り、完全に王族はお飾り以外の何者でもない。しかし建前上、居る。

だから、庶民にとつて王族とは、違う世界の生き物だった。
ましてや、生活に苦しむ労働者にとつては、限りなくどうでも良い。

そんな時代である。

秋風が少しづつ吹き始め、夏に別れを告げる頃。

アルキー・シユ王国領内の、閑静で小さな村、ロキシース。

街道沿いにレストランや宿がひしめき合つ、小さな村である。旅人は集うが、賑わうほどではない。裏通りには居住者達の家々が、ひつそりと佇む。さらに裏手には、畑や牧場が広がる。

ある朝、そんな街並みの一角、とあるレストランの中で、「コーデュ。アンタ、今日限りで解雇だよ」

女将である中年女性が、営業スマイルを浮かべて言った。
言られた方も、

「そーですか」

とつまらなそうに答えるのみだった。

「コーデュ」という名の妙齡の女性は、空色の瞳で、金の長い髪を横は長く垂らし、後ろは巻き上げている。その耳は人のそれより長く鋭い。エルフの証だ。左側の耳にだけ、金の装飾の入った、小奇麗な赤い宝石のピアスをしている。

一見、モデルか女優か、と思うほどのプロポーションだが、着ている服はメイド服。銀メッキのトレイを持つて、客に笑顔と料理を運ぶのが仕事。ウェイトレスだ。

しかし困った事に、彼女は極めて無表情だった。それが解雇の原

因でもある。

「全く、アンタみたいに愛想の悪い子は初めてだよ。次は接客じゃない仕事を選ぶんだね、皿洗いとか、調理師とか」

「『忠告、ありがとうございます』」

「ほら、最後の仕事。行つといで」

女将に言われて、コードユはスタスタと店に出て行つた。
これが彼女の、一三回目の失業である。

アルキーシュ王国の王都、クレシュ。その西の小さな村がここ、ロキシーヌ。

クレシュへの観光客や商人が集うこの村の、主な産業は宿泊施設と酒場である。

よつて、求人も接客業と調理師が中心になる。

が、コードユは困つた事に、そのどちらの素質も無かつた。

彼女は魔術師だ。それも超天才と、その筋の人間からは言われる才女である。

しかし、時代が時代だ。魔術は人件費がかかる、と敬遠され、多くの多くの作業が機械化された現代社会。

コードユは魔術師である以外に、他の何一つ、良い所が無い。しかも現在、魔術師という職業は、廃れに廃れていた。

そして天才は職に就けずに、求人広告を見る日々を送つていたのだ。

今年の夏、コードユは「若くて可愛い女の子募集中」という求人を見つけて、ロキシーヌ村の小さなレストランに就職した。

最初は女将も「こんな美人そつは居ない」と喜んでいたが、何せ手が遅く、表情も無ければ態度も悪いコードユである。時には横着をして魔術でポイポイ皿を配つたりする。

そんな事をしていたら、クビになつた。

そうなつた理由は大いにコードユに有るが、それに気付けば人間、失業なんてしないもので。

当の「コード」は、「私って本当に運が無いなあ。もう諦めて、今流行のヒートにでもなるつかしら」ぐらいに思つていたのであつた。

さて、このレストランでの最後の仕事のために、コードは店に出て。

すると朝一から、店に並ぶ一人の男が居る。

金髪で、妙に身なりの良い男だ。長身瘦躯で、顔立ちは良いが、どこか嫌味つたらしそうである。白いフリルのブラウスに、細いベルベットのパンツ。全身から「私は貴族です、金持ちです」と叫んでいるような雰囲気さえある。

彼は毎朝必ず、この店に来る。且当では「コード」のようだつた。何故なら毎度、バラの花束を抱えて来ては、それをコードに押し付けようとするからである。

今時、こんなダサい王子様きどり、流行らないわよ。

「コード」はいつもそう思つていた。しかし、営業スマイルも出来ないが、嫌そうな顔もしない無表情が、より一層このストーカーの誤解を深めているようだつた。

「コード」はドアまで行くと、「Open」の看板を掲げ、鍵を開ける。すぐには男が入つて来て「おお、麗しのレディ！ 今朝もまた一段と美しい！」と、お決まりの挨拶。

「どうも。いらっしゃいませ」

「コード」は淡々と言つて、彼をテーブルに案内した。彼は必ず厨房に一番近い席に座つて、そして二階とコードを見つめ続ける。

「ご注文はお決まりでしょうか」

「チョコレートパフェを大盛りで頼もう！」

そしていつも、チョコレートパフェ（大盛）を頼む。

「かしこまりました」

「コード」がオーダーを通して帰つて来る。他に客は居ない。といふか、こんな朝からレストランに来る客など居ない。

モーニングサービスなどと洒落た事をする店でもないし、第一、この辺りでは朝食は宿専属の食堂が用意する。宿泊者は宿で、地元民は自宅で朝食を取るのが普通。

だのに、この男は毎朝チヨコレートパフェ（大盛）だけを食べに来る。何故かといえば、それは恐らく、そこにコーデュが居るから。という事は、この男は本気のストーカーだ。

コーデュは自分で完全に結論を出していた。それは男の方も同じに違いない。ただし、その内容は全く違うのだろうが。

「レディ、今日こそ私の気持ちを、この花束と共に受け取ってくれたまえ！ 私と愛を語ろ！ いつまでそうして、私を焦らしているんだい」

「チップは受け取らない事になっていますから」

極めて事務的に答えるが、それがより一層ストーカー魂に火をつけるらしい。男は「あああああ」と微妙な裏声を出して、「レディはつれない、でもそれがいい」などと呟いている。

コーデュは一つ溜息を吐いてから、考えた。

明日からどうするか。とりあえず職業安定所に行かなくては。今度は裏方とか、魔術師募集とか、そういう求人があるかもしれない。そんなすかな希望を胸に、職業安定所に向かつて早一三回。またしても失業した原因は、この男にも有るかもしれない、とコーデュは思った。

実はこの男、八つ前の仕事（花屋の店員）の時にいたストーカーなのだ。

接客向きで無いのはその時から同じで、コーデュはずっと裏方として、花の手入れや梱包に携わっていた。やつと仕事にも慣れてきたある日、店番を頼まれて仕方なく店先に立つていると、この男がやって來た。

「妹に誕生日プレゼントをしたくてね。花束を作ってくれないか」と氣取って注文する男に、バラの花束を作つて渡した。すると彼は

「おお！ レディには才がある、そして美しい！」

などと言い、散々騒いだ挙句、それから一年近くストーキングを続いている。毎日店に来では「レディはこの世に残された、ただ一人の天使だ！」と時代遅れ甚だしいセリフを吐いて、その場で踊つたり跳ねたり、あらゆる意味で気持ちが悪かった。

そして失業すると、どういう手段で調べているのか、次の職場にも現れる。現れて一週間程度でクビになる。それは一種のジンクスと化していた。

よし、今度こそ、このストーカーを見つからないようにしよう。そして未来有る人生の第一歩を踏み出すのよ、コーデュ。

コーデュは無表情で自分に言い聞かせた。とりあえず、帰りに変装キットを買っておこうと決意する。

そうとも知らず、ストーカーはいつも通りチョコレートパフェを食べて、「明日も来るよハニー、式が楽しみだ！」と叫んで、帰つて行つた。

否、就業時間まで待ち伏せしているのだが、バレバレだった。いつそ治安当局に通報すれば話は早いのだが、コーデュは彼から犯罪の匂いを感じていたわけではないし、何よりも面倒なので、放つておいた。

翌朝、コーデュは買つてきた変装セットを使用した。

サングラスに鼻眼鏡で髭とテンガロンハット。ものすごくボンデージな謎のヴィジュアル系コートを身に着け、最小限の荷物をトランクに詰め込み、家を出た。

ついでに夜逃げ（？）も実行である。大家には昨日金を払つておいたので、逃げている対象は件のストーカー以外の何者でもないが。ここ半年を過ごした安アパートを静かに出る。

ストーカーはオペラグラス片手に、茂みの中で徹夜した模様だ。

しかし彼は、変装中の「コードユ」に見向きもしない。ちなみに、他の人間は「コードユ」を見ずには居られない様子だった。仕方が無い。度を越えて怪しそうである。

だが、ストーカーはまさに「コードユ」しか目に入っていないようで、カーテン越しの物陰をじっと見つめるばかり。その視線は、獲物を狙うハンターの如く真剣である。

それ故に彼は、「コードユ」をみすみす逃がしてしまったわけだ。

「コードユ」は「さよなら、永遠に」と心の中で呟いて、その場を後にした。

職業安定所は、ロキシーヌ村の外れに有る。

東の隣国キヤドゥーが開発した機械は、庶民にも影響を与えた。魔術師がまず打撃を受けたが、その後には庶民にも波及する。

五年程前から普及し始めた機械は、最初は魔術の分野を、そして徐々に、全ての作業を人の手から奪っていく。人件費削減のために、大量の人間がクビになり、街は求職者に溢れている。それも機械の弊害と言えよう。

だが彼らは、普通の人間なりに良い所がある。秀でてもいいが、劣つてもいないので。どうでもいい仕事なら、まだこの世には存在していて、こと人の尊厳を捨てれば、生きていきようなどいくらでもあった。

しかし「コードユ」はまだ諦めていなかつた。魔術師にも、新たな生き残り方があるに違いないと信じ、夢見ていた。そして、彼女は夢を幻想にするタイプではなかつた。

物陰で変装セットを脱ぎ、「ミニ箱に捨てる。それでもまだ不安なので、伊達眼鏡をかけて、普段なら絶対しないような、それはもうババ臭い格好をした。長袖のシャツに、ダブダブのワンピース。しかも足首まできつちり隠すものだ。ついでに三角巾まで頭に巻いて、

「コーデュはやや警戒しながら、職業安定所に入った。

職業安定所は今日も大盛況。景気はいいと政府が言っていたが、一番いいのはここだらう、とコーデュは考えながら奥に進む。行列と人ごみにもみくちゃにされながら、コーデュは求人広告を探す。もはやストーカーの事などどうでも良い。とにかく、人の群れを押しのけて、壁に貼り付けられた広告を見る。

魔術師、魔術、魔魔魔魔ママMA、と眼を走らせていると突然、どつと笑い声が上がった。求人の文字を読むのに必死だったコーデュが振り向くほどだから、よほどのものだ。

見ると、一人の青年が立っていた。

クセのある銀髪、赤い瞳。シャキッとした白いシャツを着こなす、見るからに育ちの良さそうな青年だ。そんな彼がこんな場所に居るだけでも、眼を引くところはあつたが、何よりもコーデュが驚いたのは、

「広告主募集中？」

彼の額に、赤い字でそう書いてあつた事だ。

「兄ちゃん、そりやあ、なんの冗談だい？」

一人の男が笑って尋ねると、青年ははつきりと答えた。

「商売です」

「商売？」

「人が一番見てしまうのは、高い土地料を払う看板でも、毎朝欠かさずに配る広告でもない。人の顔だと思います」

青年は額に「広告主募集中」と書いた滑稽な姿であつたが、實に毅然としていた。

「僕はこの額を看板として貸し出します。ついでに僕の出来る限り、広告主をアピールする。料金は通常の広告代金の一〇分一程度で結構です。誰か試しに、僕に広告を打ちませんか」

面白い事を言う人だな、とコーデュは思った。

古来から、額は神聖な場所だった。こと、過去に魔術師達は、己

の威儀を額に現した。特定の色と紋様によって、自分の地位を示すのは当然の事で、中には宝石を直に埋め込むような者も居た。

それもまた、魔術の衰退と共に消え、今や額の価値は無いに等しい。

しかし、彼はもう一度、今の時代に合わせた額の使い方を考えたのだ。

「コーデュは少し嬉しくなった。彼はきっと、魔術師に違いないと思った。理由は額を使っているから、というだけだった。が、今の世の中で、必死に生きようとしている仲間だと感じたのだ。

「面白いね、お兄ちゃん。それで、ニコニコ笑つてくれるのかい、無表情だけど」

と、一人の若い女性が青年に声をかけた。求人申し込み窓口の方から出て來たので、恐らく雇う側の人間なのだろう。

「こんな冗談みたいな事をして、笑つていたら馬鹿にされます。あくまで宣伝は無表情、及び微笑程度で行います。街角で契約者の店名、事業内容を演説します。お望みなら街頭販売等も受け付けますが、別料金になります」

「ふうん。試しに、ウチでやってみるかい？　ウチは『ボルタ工房』って言うんだ」

早速商談がついたようだつた。人々が見守る中、女性と広告青年は、職業安定所を出て行く。

「……」

「コーデュはふと思いついて、その『ボルタ工房』の求人票を探した。

ストーカーに長く憑かれれば、生き方も多少変わつてくるようだ。コーデュは彼と話がしてみたい、と思った。エルフは気高く、また魔術師は氣難しいという基本性質がある。それゆえ、営業スマイルの一つも出来ない「コーデュだが、この時ばかりは違つた。

自分の無表情さら味方につけて、生きようとするあの態度。彼が魔術師だろうが、そうでなかろうが、コーデュは彼と、とにかく

話がしてみたくなったのだ。

そして三〇分後、コーデュは見事『ボルタ工房』の求人広告を見つけ、そしてチャンスが来たのだと確信した。

『ボルタ工房……美術工芸品取り扱い。魔術に心得有る人間、募集中』

2 ウェル

ボルタ工房は、職業安定所からほど近い場所に、ひつそりと佇んでいた。

品の良い、ウッドハウスのような店先には、ガラス細工が飾られている。機械は多方面に進歩したが、ガラス工芸は未だ手仕事の部分が多い。

これは期待出来そうだ、とコーデュは思った。

店に入ると、たくさん商品が棚に置かれていた。ステンドグラス風のランプシェード、グラス、猫の置物。全てガラス工芸だ。そして店内には先ほど見た、店長と思わしき女性と、件の広告青年が居た。

「あら、いらっしゃい。今日は定休日なんだけどね」

まだ若い店長だった。黒い髪を短く切って、質素な作業服を着ている。特別美人という訳でもなかつたが、どこか惹かれる眼をした女性だった。働く女の魅力、という奴なのかもしれない。

「あ、あの。求人広告を見て、来たんですけど」

「ああ。早いねえ。じゃあ、ちょっと待つてくれる？ まずはこの人に宣伝をしてもらわなきゃ」

店主はそう言って、青年に説明を始めた。

「ウチはまだ、開店したばかりでね。ガラス工芸品を扱ってるんだけど、製法が特殊なんだ。今流行の、魔法石を溶かし込んでる。だから普通のガラスより色が強い。そこらへんを、宣伝して欲しいんだよ」

「判りました。出来る限りやってみます」

説明を受けて、青年は鏡に向かい、額に文字を書き始めた。『ボルタ工房』と書くつもりのようだ。

鏡を見ながら字を書くのは、意外と難しい。が、青年はスラスラと字を書いていく。

器用ねえ、と感心しながら見ていると、店主が「コーデュの方に来た。

「求人には、魔術師募集中って書いたけど。貴方、魔術師？」

「はい」

「じゃあ、デモンストレーションで、何かやってみてくれる？」「あ、そうね。炎系は使えるかしら？　ついでだから、窯に火を付けて欲しいんだけど」

「判りました」

極めて事務的に答える、「コーデュは窯に向かった。小さなレンガ作りの窯だ。」「コーデュはあらかじめ薪を幾つか窯に放り込むと、無造作に手を翳す。そしてスッと撫でるように手を動かすと、紅い粒が空間から湧き起こり、それはやがて炎へと変わった。

「……すごい。あんた、詠唱要らずかい」

店主が感動しているのを見て、コーデュは「ええ」と素っ気無く答えた。

魔術には、方程式がある。

しかし、方程式に辿り着けるのは、最高位の術師だけだ。

一般に、魔術は「世界を取り巻く全て」に、手本を示してやらなければならぬ。

炎を起こしたければ、まず大気に説く。そして、大地に説き、植物に説く。すると、自然は応え、ある場所に酸素を寄せ、火種を起こしてくれる。

この世界において、魔術は「自然に対して哀願する」といったものだった。

それを根底から覆したのが、過去に世界を牛耳らんとした大魔術師、シユレグの一族だった。

自然に対して説くのではなく、現象を起こすために必要な物を、あらかじめ一つの方程式にしてしまう。そうすると、自然に説くための詠唱が必要無くなる。さらに経験を積めば、心に念じるだけで方程式が動く。

しかしそれらは、乱用されてはならない秘術として、封印された。事実、世界を征服しようとしたシコレグの一族は殆どが世界から追放され、その技術は国の定める研究機関にのみ伝わったはずだ。

その秘術を、「コーデュは手に入れていた。

「あたしも魔術師だけどね。詠唱要らずは初めて見たよ」

それほど特殊な技であったが、店主はその過去について気にした様子は無かった。もつとも、シコレグ一族が世界征服を目論んだ時代から、既に五〇〇年以上が経過している。よほど気にかけていい限り、そういう事実は失念しているのが普通だ。

「昨今では、何の意味も有りませんが……」

「いーや、すごい事だよ！　あんた、ウチで働いておくれよ。行程で結構、魔術を使うんだ。良かつたら、あたしと一緒に作ってくれないかい」

「コーデュは内心踊り狂って喜んだ。この言葉を何年待つただろう。彼女は私を必要としているのよ、コーデュ！　なんて幸せな事！
しかし、喜びは表に出ず、「コーデュは『はい、ようしくお願ひします』とやはり無表情で言うのみだった。

今日は定休日だから、働く気ないよ。家はあるの？　無いなら、ウチに空き部屋があるから、どうぞ。
上手い話はどんどん続く。夢のような展開に、コーデュは有頂天だった。

喜びつつ「コーデュが工芸品の手引き書を読んでいると、唐突に例の広告男が口を開いた。

「君は魔術師のようだね」

職に就けた歓びに、「コーデュは彼と話したかつた事もすっかり忘れていた。その事を思い出し、コーデュは手引書をしまつと、広告男を見る。

「ええ、そうだけど」

「すごいね」

「貴方のおでこも、相当だけどね」

「僕はしがない——三人目さ」

「？」

良く判らない言葉に、コーデュが訝しい顔をすると、広告男はしばらく考えて、

「ふむ。……君、もし僕がこの仕事でお金を稼いだら、僕に雇われないかい」

と言つて来た。

「貴方に？ どうして。何のために？」

広告男に雇われる。それは、自分もおでこに広告を打つという事だろうか。それは遠慮したい。

コーデュはそう考へて、少し嫌そうに尋ねたが、答えは思いもよらぬものだった。

「冒険旅行。つまり、僕は旅に出ようと思つてゐるんだ。しかし、仲間が居ない。探し物を見つけるには仲間が必要だ、と父に言われた」

「旅？ 今時？ ……探し物つて、何？」

「それを探す旅でもある」

広告男はコーデュを見た。彼の額には『ボルタ工房』と書かれていて、かなり滑稽な状況だつたが、顔は真剣そのものだ。

「君さえ良ければ、僕と一緒に、探し物の旅に行かないか。君のようないい魔術師と出会つて、僕は声をかけずに居られなかつた。考えてみて欲しい」

という事は、彼は魔術師では無いのだ。コーデュは少し落胆する。広告男はそのまま店を出て行こうとする。そして扉に手をかけた時、思い出したように言つた。

「僕は、ウヘルと呼ばれている」

「……ああ、名前？ 私、コーデュよ」

「あ、そうそう、あたしはフイリ」

店の奥から出て来た店主も、ついでに名乗った。ウェルは小さく頷くと、そのまま店を出て行く。フィリエによれば、彼は宿を取つてゐるらしい。

「それにしても、変わった人だねえ、あの人」「ええ……」

目の前で引き抜きの話をしていたといふのに、フィリエは気にした風も無い。

この人も変わってるな、とコーデュが思つていると、フィリエが

言つ。

「ま、あんたも変わってるけどね！」

「そうですか？」

「そうだよ」

「そうですかねえ……」

「コーデュが首を傾げると、フィリエは笑つて言つた。

「それにあんたも、探し物を探す旅の途中みたいだしね」

翌朝から、ボルタ工房は大賑わいだった。

ウェルがどんな宣伝をしたのか判らないが、とにかく客が入る。そして「これか」と商品を眺め、その多くが買い求めて來た。自分は接客向きではないと事前に説明し、コーデュは店の奥で魔術による仕事をし、接客はフィリエが自ら行つた。

客足は勢いを緩めず、昼を過ぎる頃には店内に入りきれなくなり、さらにはその人ばかりを見て寄つてくる人間でいっぱいになつてしまつた。

そして、商品は見事に無くなつた。

夕方には閉店して、商品の製作にからなければならなかつた。収益を数えて、喜びながら製品作りに精を出す一人のもとに、ウェルが戻つて來た。

「ウエル！ あんた、どんな宣伝をしたのさ」

もう大変だつたんだからね、と嬉しい文句をフイリエが言つと、
ウェルは椅子に腰掛けながら言つた。

「駅前で突つ立つっていた。何の冗談だ、と聞かれたから、こちとら

命がけだ、僕の首がかかっているんだ。世界で最も美しいとされる
ガラス美術品を、君達に伝えられなければ、僕の生まれてきた意味
は全く無い、とかそんな事を答えて、地図を配つた」

「……せ、世界で最も美しい、ねえ」

「それとか、幸福を招くガラス細工とか、古代シュレグ一族にまつ
わる技術の結晶とか、色々言つた」

「さ、詐欺に抵触しないかしら？」

「さあ……まあ、彼らも信じた様子では無かつたから、面白半分で
見に来たんだろう。買つて行つたという事は、彼らの価値基準と、
こここの商品が天秤に乗つたという事ではないかな。詐欺には当たら
ないだろ？」

ウェルは弁当と思われるサンドイッチを取り出しながら言つた。
それを見てフイリエが慌てる。

「ちょっと待つて、ちゃんと夕飯は用意してるわよ、看板さん。お
かげさまで大盛況だつたんだから、あんたに食べてもらわないと」

「……では、お言葉に甘えて」

その言葉にウェルは、あつさつとサンドイッチを袋にしました。

その晩は三人で食事を取る事になつた。店の一階は居住スペース
になつていて、キッチンとリビングが有る。そこでフイリエは豪華
な料理を作つて待つていた。

コーデュは久々に贅沢な食事が出来る、と喜ぶ。しかしそれが、
ウェルのおかげであつて、自分が職に就けたからではない事が少し
寂しい。

ウェルは額に広告を打つような人間だつたが、妙に気品があつた。
フォークとナイフを使って、お上品にいつまでも食事を続ける姿は、

本当に貴族のようだつた。額を除いては。

食事もそこそこに、フィリエは「今日の繁盛を知り合いで伝えに行く」と店を出る。しばらくして、コードは尋ねた。

「ねえ。ウヘルって、どうしてそういう事、しようと思つたの?」「そういう事とは?」

「おでこの……」

「ああ」

ウヘルは「一粒一粒口に運びながら、簡潔に答えた。

「金になると思つたから」

「でも、他にもお金を稼ぐ方法はいくらでもあつたでしょ? 掃除とか、皿洗いとか。そうね、土木作業員」

「それらの方法は、確かに金稼ぎに向いている。しかし、非効率だ。僕は僕の体の一部に、誰かの名前を書くだけで、収入を得る事が出来る。まして、それを副業としながら、別の仕事をする事も可能。そうすれば、金は早く集まる」

「でも、恥ずかしくないの?」

「万民が嫌がる事ほど、金になる。僕にとって額とは、僕の部品であつて、尊厳を感じる場所ではないからね」

ウヘルはステーキを小さく切つて、口に運んでいく。

「……でも、お金持ちはぽい感じ、色々」

そんな仕種を見てコードが率直に言つと、ウヘルは「うん」と小さく頷いた。

「資産を差してお金持ちと呼ぶなら、僕はその部類だらうね。でも僕は、現在の所持金の水準が低い

「没落貴族つて事? あ、ごめんね」

「いや、君のように素直に言う人は嫌いじゃない。僕も言つからね。……生憎、没落したわけではない。資産は現在も運用中だが、手元には無い。所持金を集めるために、僕はこうして額を売つている。金は僕が旅に出るために必要だ。それは資産を切り崩して作らないと決めたから、苦労している」

「……あ、判つた。でも、なるべく楽して稼ぎたいんでしょう」

「簡潔に言えば、そうなるね」

「ふうん」

「コーデュはアイスクリームをつつきながら、考えた。
お金が有るのに、無くて、旅に出たくて、働かなきゃいけないけど、苦労はしたくない。

虫のいい話にも聞こえた。微妙に、意味の判らない話もある。
そもそも、何故そんなに旅に出たいのかも判らない。金持ちの醉狂
だろうか？

「コーデュがそんな事を考へていると、ウェルが尋ねて來た。

「君は魔術師だ。それも、とても優れた。どうしてこんな小さな村
で、職探しを？」

「時代が悪かったのね」

「コーデュは一つ溜息を吐いて言つ。

「機械とかが發展して、私達魔術師の専売特許が崩れた。だから魔
術師はもう、要らないの。どんな偉大な魔術師も、今は苦しいはず
よ。本当に」「一部の人を除いて、殆どは社会のお荷物になっちゃ
つたわけで……私もその一人」

「ふむ」

「下手に魔術ばっかりやつて來たから、魔術学院を卒業したら働け
なくてね。メルティーナの国立魔術研究所は、履歴書で落ちちゃつ
たし……」「ネも無いし。……でも私、諦めたくはなかつたのね」

「ど、言うと？」

「私は私なりに、魔術と付き合いながら生きていきたい、と思つた
の」

魔術師は不要。今の世界に溶け込んで、魔術を忘れるしかない。
多くの魔術師は、その術を捨て、一般社会に流れ落ちた。彼らは
ただのしがない平民の一人になる。今まで培つてきたものを全て捨
てて、ただの人間に。

そして残りは、「時代が悪い」と現実も見ずに、恨みの世界に引き

こもつてしまつた。

そういう人々を、コーデュは何人も見てきた。だからこそ彼女は、そのどちらも選びたく無かつた。

「ただ……その方法が判らない。魔術を捨てずに、意固地にもならない。そうやって生きていく、方法が判らないの。だから今はアルバイト生活をしてるんだけど……時々、結局皆と同じなんじゃないかって、不安になるわ」

「……ふむ。君も、探し物の途中のようだ」

ウェルは少しだけ嬉しそうに言つた。

「僕も君も、同じ物を探している。見た目は違うのだろうが、きっと似ている。僕と一緒に、探しに行かないか。君が断つても、僕は探さなきゃいけない。いずれ僕はこの地を去る。それも、近いうちに。その時、君さえよければ……一緒に来てくれないかい」

それから数日、彼らの仕事は続いた。

ウェルの宣伝は素晴らしい効果で、連日客がつめかけ、商品は全て無くなる。その度にフイリエは大喜びで、ウェルに代金を支払つた。

その額は少しづつ増えているようだつた。

「看板も宣伝も、普通にやつたら馬鹿みたいに金がかかることね。これぐらい、安いもんだよ」

とは、フイリエ。コーデュにも賃金が支払われた。詠唱が無い分、作業が早いコーデュの力で、生産数が四倍に増えたからだった。

「コーデュは生まれて初めて必要とされる事にやりがいを感じていた。しかし、何か物足りない。」

これは、自分の探していた物ではない気がする。

そう考える度に、コーデュはウェルの言葉を思い出した。

3 コルト

「コーデュとウェルがボルタ工房で働き始めて、一週間が経とうとしていた。

ウェルは着々と金銭を貯めたようで、「充分な金が出来た」と言つてはいる。工房 자체もリピーターがついて、これからは安定した客足が望めそうだった。

そしていよいよ、ウェルは旅立つ事にしたようだ。

その日、ウェルは宣伝を止め、朝から店の中でくつろいでいた。フイリエに「旅に出る」と断りを入れ、鞄に色々詰め込み、準備をしている。

「コーデュはまだ決断出来ないでいた。

フイリエは「行つて来ていいよ、飽きたらまた帰つて来て」と、決して厄介払いではない態度で言ってくれる。

しかし、コーデュは決めかねていた。やつと見つけた職を手放してまで、旅に出るという決意が出来ないのだ。

「ハニー！ やつと見つけたよ！」

工芸品を作つていたコーデュは、その馬鹿そうな声に、思わず手を滑らせた。床に落ちたガラスが割れて、盛大な音を立てる。が、店に居る全員の視線は、声のほうに向いていた。

そこには、件のストーカーが、バラの花束を抱えて立つていた。ストーカー男は周囲の視線も気にせず、コーデュに近寄つて言う。「私はずっと、ずっと君が部屋から出るのを待つていたんだ！ だのに君ときたら、いつの間にかこんな所に！ イリュージヨニストだね、ハニー！」

この勘違い男、またしても私の人生をメチャクチャにする気か。

今日とこう今日は、こいつに言う事言つて、ついでに雷魔法でビ

リビリ言わせてやる、とコーデュは立ち上がる。

そしてコーデュが手を出し、方程式を組もうとした、その時、

「……は！」

ストーカーは何かに気付いて、突然コーデュから目を反らした。コーデュが訝しんでそちらを見ると、ウェルが呆れた顔でストーカーを見ていた。

「き、き、貴様、一二三番…」

ストーカーはワナワナと震えながら、バラの花束を落とす。何が起こっているのか判らず、皆が事の行方を見守っていると、ウェルは眉を寄せて言った。

「……そういう貴方は……えーと……一八番くらいですか？」

「一〇番だ！ 失敬な……！」

番号を言いながら、ストーカーは怒っている。が、見ている方は彼が怒る理由も、何が一〇番なのかも判らない。

「貴様、何故ここに居る…？ ……ま、まさか一二三番、貴様、私の

『王たる証』を奪つつもりか！？」

「さあ……」

とウェルは曖昧に首を振るだけだ。

「ぬぬぬ、貴様あ～！」

ストーカーがあまりにも怒っているので、コーデュは止めるのも兼ねて、尋ねた。

「ねえ貴方、何の話をしているの。一二三番とか、『王たる証』とか

……」

すると、ストーカーは今までの怒りも何処へやら。コーデュに向かってニッコリと笑みを浮かべると、気取ったポーズを決めて言う。「名乗り遅れてしまない、レディ。何を隠そう。私はコルティエ・ウエリード・ユーロフステイ・ルーヴァイス・リュ・アルキー・シユ。通称コルト。このアルキー・シユ王国の、正当なる王子なのだ」

「一〇番目のね」

ウェルが付け足すと、辺りから「ええええ」と不満の声が上が

つた。もちろん、「コーデュも言った。

「キモいストーカーのクセに……」

思わず本音が出たが、ストーカーもといコルトは、聞こえた様子も無く、ウロルを指差して言った。

「そして奴！ 滑稽極まりない格好をしたこの男！ ここには二三番目の王子、つまり私の弟だ！」

コルトの言葉に、こちらにも不満の声が上がる。どちらも王子と言われても困る人間だった。

「ご自分が名乗られたのに、僕が二三番のままでは困りますね、六番さん」

「二〇番だと叫うのに！ そして私はコルトだ！」

「僕はウェルエッシュ・レンディア・カリフレイル・ルーヴァイス・リュ・アルキー・シユ。アルキー・シユ王国の、二三番目の王子です」

「コーデュはとんでもない事が起きかかっている予感に、寒気さえ覚えた。

「コンデュ大陸の歴史は古い。

そもそも五〇〇年以上前には、大陸内で五つの国が争い合っていたという。

お互いに攻防を繰り返す、長い長い戦争の時代。各国王達は、こぞって魔術の研究を進めた。専属の魔術師達を雇い、より強力な魔術の開発を要求していた。

そんな時代に生まれたのが、かのシュレグ一族、その筆頭たるザドゥルーエ氏だった。今でも一般にシュレグと叫うと、彼の事を指す。

元々、当時東の一帯を支配していたモールという王国の、魔術研究者として生きてきたシュレグの一族は、エリート中のエリートだったという。

とりわけザドゥルーエは天才と呼ばれ、現在世に伝わる禁術の多

くは、彼が開発したと伝えられている。召喚術に到つては、彼が全てを編み出したと言つても過言ではない。

また、「新魔術理論」という難解な著書を発行し、方程式による魔術の形成を確立した。彼はモール王国はおろか、世界の英雄であるはずだった。

ところがシユレグ一族は、ある時を境に、魔力の無い人々……彼ら魔術師の言うところの「凡人」達を攻撃し始めた。

モール王国を始めとし、近隣の国々はシユレグ一族の魔術に対抗出来ず、滅んでいく。「凡人」は処刑または奴隸とされ、魔術師達も多々が召喚術や魔術の基礎のために犠牲となつた。

もはや大陸がシユレグ一族に支配されようとしていた。その時、四人の戦士が立ち上がったといふ。即ち、アルキーシュ、メルティーナ、キャドウ、クレンセオス。現在の各国の初代王達だ。

彼らはシユレグ一族を滅ぼし、そしてそれぞれが、大陸を分けて、王国を作つた。

アルキーシュ王国は、四人の一人、アルキーシュが作った国だ。アルキーシュは国を定め、法を定めると、間もなく子供らに遺言を残して死んだ。

次の王は、最も価値の有る功績、グレイナス鉱山を発展させた、三男のユーグとする。

それ以来、アルキーシュ王国は、生まれた順に関係無く、父王の認める最大の功績者を次の王とした。やがてそれは、王位争いのルールとなる。

王の血を引く全ての男女は、一五歳になると仮の王権を与えられる。彼らは現在の王が死ぬまでに、自らの信じる、最も価値有る功績を手にし、王に説く。それを王が納得すれば、王位に近くなる。

常に王位への順番は開示されていて、王子また王女は、その成績表を見ながら王位を目指し奮闘する。ある者は発明をし、ある者は歌い、ある者は人々を救う。

そしてその結果として、物品及び人物を提示するのも、ルールだつた。

現在の王ルーヴァイスは正室と一一人の側室を抱え、その間に三六人の子を作っている。そのうちの五名は既に死去し、残った三一名は全員が一五歳を超え、王位争いに参加しているといふ。

「私は、愛の世界を作る。その第一歩として、最愛の妻をこのレティにしようと思っていたのだ！ だのに、貴様……貴様は、私から王位を奪うつもりだな！？」

お互い名前も知らなかつたのに、いつの間にか妻という事にされている。

「コーデュはコルトの本気のストーカーっぷりに辟易してきた。第一なんだその、愛の世界なんて甘つたるくて馬鹿げた響き。夢でも見ているんじゃないの。

「コーデュは色々頭が痛かつたが、ウェルは平然としている。

「王位は奪い合つものだと、この国では定めています。不当な事ではないでしょ。第一、僕はそういうつもりで彼女と同じ職場になつたわけでもないですし……まあ、彼女さえ良ければ、同行して欲しいとは思つてますけど

「なにい、何処に連れて行くつもりだ！？ 許さんぞ。断じて、断じて許さんぞ、一三番！」

「コルトはひとしきり叫んで、そして言った。

「ひなつたら、決闘だ！ 彼女をかけて、決闘するのだ、一三番！」

「で、コーデュは何が何だか判らないつちこ、景品にされてしまつていた。

「あんたも大変ねえ、もてて」

「いや、これって、もてるとか、そんな感じの事ですか？」

「コルトは「明日の正午、この店の前で決闘だ！」と言い捨てて去

つた。「仕方ないなあ」と呟いて、ウロルは何処かに行ってしまった。決闘は受けるらしい。

その晩、店のリビングで夕飯を食べながら、フィリエはコーデュを茶化した。

「いい事よ、男に言い寄られるつてのは。あたしは魔術師の誇りを捨てられなくてね、まだ男に縁が無いのよ。出来たら魔術師の夫が欲しいんだけどねえ」

「魔術師の夫婦か……いいなあ」

「コーデュも溜息を吐いて、憂鬱そうに言つ。

「でも、食べていけないかも……」

「そうなのよね。そこが困つたところ。あたしね、姉さんが居ただけど、死んじやつたの」

「え?」

「結構歳は離れててね。憧れの人だつたよ、魔術師として生きてたから。でも男の魔術師と意気投合してね。結婚して……子供も作つて。だけど、魔術師として生活する事は出来なかつたんだろうね。姉さんは必死で普通の仕事をして、拳句、息子と一緒に事故で死んじやつたんだつてさ」

「……」

フィリエは悲しそうに笑つて言つ。

「それもあつて、あたしは魔術師として精一杯生きていこうと思つたんだけど……メルティーナ国立魔術研究所の試験に落ちちゃつてね」

「フィリエさんも?」

「あら、あんたもなの?……あんたがダメなら、あたしじゃダメなわけね」

フィリエは苦笑して、店内に置かれたガラス細工を見る。

「……結局、あたしは妥協して、この工芸品を始めたの」

フィリエの作るガラス工芸品は、どれも上品で美しい。纖細で、そしてどこか、物悲しさが漂つている。

これだけは売れない、とウインドウに飾られている、女性の横顔をかたどった皿。その瞳は静かに伏せられ、陰鬱^{いんくつ}そうな表情を浮かべている。しかし、どこか惹かれる風情が有つた。

「でも、あたしはこの仕事で生きていくしかないのよね、もう、お店開いちゃつたし。店を始めたからには、お金が無いといけないしね」

「そう、ですね……」

「だからね、コーデュ。あたしはあんたが羨ましいんだよ」

「私が？」

「コーデュが怪訝な顔をすると、フイリエは愉快そうに笑つて言つ。「あんたは若い。才能も有る。そして、選択肢が目の前に転がつてゐる。羨ましい話さ、どこへでも行けるんだからね。……あんた、良く考えて選びなよ。でも、慎重になる必要は無いからね。何事も経験、つてところも、あるから」

ただし。フイリエはコーデュの目を見つめて、言つた。

「諦めちゃダメだよ。今を未来だとも思っちゃダメだ。常に先があるって思つてないと、あたしみたいに、こんな所で止まっちゃうからね。あんたは、自分では気付いてないかもしれないけど、理想に一步でも近付こうつて、思つてる。いい事だ。大事にするんだよ」
フイリエの表情に影が差す。コーデュは思わず、大声を出していた。

「フイリエさんは、止まつてなんか無いですよ。止まつた人が、こんな綺麗な作品、作れるはず無い。大丈夫です。フイリエさんも、まだ諦めないで、頑張りましょう

らしくない。自分でもそう思つたが、言わばには居られなかつた。本当にダメになつた人間の事は良く知つてゐる。彼らはもう、どうしようもない事になつてしまつ。作る事も、諦める事も出来ない人間になる。

コーデュはそんな人間を、何人も見てきた。それも、同じ魔術を志し、そして挫折した人々を。

けれどフィリエは店を開き、魔術を使って作品を売っている。それだけでも素晴らしい事だった。コーデュは所詮、彼女の試行錯誤の末に出来上がった物を、コピーしているに過ぎない。

そしてコーデュは、自分が理想に少しも近付いていない事に気付いていた。その上で、この場所に甘えるか否かを悩んでいた事に。

「……ありがとう、コーデュ」

フィリエは微笑んで言った。

「あなたは、ここで一生を終えるような子じゃないよ。まあ、あんたが納得してるなら話は別だ。でも、納得していないなら、その探し物を見つける努力をしたほうがいい。脚を止める事はいつでも出来るけどね、一度休んだら、もう一度歩き始めるのは、難しいんだよ」

フィリエの言葉は静かに、物悲しさを伴いながら、コーデュの中に染み込んでいった。

翌日、正午。ボルタ工房前には、ウェルの宣伝による効果ではない人ばかりが出来ていた。小さな村なので、決闘云々の話が広がったのだろう。

そこには、コルトの姿もある。

「遅いっ。遅いぞ、二三番！」

約束の時間になつても現れないウェルに、コルトは不愉快さを隠せないようだつた。

コーデュは内心、ウェルは来ない気がしていた。第一、コルトはともかく、ウェルには命をかけて戦う理由が殆ど無い。

「ねえ、王子様。そんなにコーデュの事が好きなら、決闘なんてよして、彼女に判断を任せたらどうなのさ」

フィリエが迷惑そうに言った。店の前で決闘などされたら、誰でも嫌だろ？。が、コルトはそんな事は頭に無い様子だった。

「問題は、彼女を一二三番が奪おうとした事だ！ 私に逃げる事は許されない。互いの命をかけて勝負するしか、方法は無い！」

どうしてそうなつてしまふのか、コルト以外には全く判らなかつた。が、とにかく彼にとつてこの問題は、もはやどちらかが死なない限り解決しないらしい。

コルトは何やら豪奢なレイピアを腰に差している。

今時、レイピアで決闘とは、古風な奴。

コーデュがそう思つていて、辺りがどよめき始めた。

「な、なんだ？」

コルトも困惑して辺りを見渡す。しばらくすると、その正体が割れた。

「わ、わわわ……」

「ウエ、ウエル……！？」

そこには、巨大な兵器を持つてこちらに向かつてくる、ウエルの姿があつた。

「に、一二三番！ それは何だ！？」

「コーツロット社製、一四三mm砲。オーソドックスな軍用機銃ですね。通称『デス・ロイド』。秒間一〇〇発連射可能、一・五トン。車輪付き」

「そ、そういう事を聞いてるんじゃない！ な、何故そんな物を！？」

「何故って、決闘するんでしょ？ エーと、一二三番さん」

「二〇番だと言つてるだろ？ だ、大体、そんなの決闘に使うな！ 卑怯だぞ！」

「決闘という言葉を辞書で引きましたが、一対一で戦う事とだけ書いてあって、武器の指定はありませんでした。だからこれは正々堂々とした決闘ですよ。卑怯と断定する根拠は無いですし、この場合、準備不足な貴方のほうが悪いのでは？」

「な、何い……！？」

自信満々で語る人間は、例えその言動に多少問題が有るつとも、

信頼を寄せられるという。

今、ウェルは何一つ迷い無く、恐ろしい事を強気で喋っている。すると、他の者達も何となく、「それもそうだなあ」という気になる。それこそ大物の格という奴だが、コルトにはそれを受け入れる事は出来なかつた。

何故なら、「それもそだな」と思つたが最後、射殺されるからだ。

「ま、待て！ お前の言つている事は、理屈に過ぎない！ どう明文化されていようとも、そこには人間の倫理觀が存在するべきだ！ 倫理的に言つて、お前の行動は間違つてゐるぞ！」

コルトの言葉に、人々は「そだそだ」と言つが、ウェルは顔色も変えず、静かに反駁する。

「ではお聞きしますが、貴方は暴漢に襲われた時、暴力や殺人は倫理的に正しくない行為だと信じて、なすがままになるのですか？」

「いや、それは……」

「倫理觀とはその場でどうにでも傾くものです。それを根拠に僕の行動を批判するのは、解せないです」

「む、むむ……」

コルトは黙つてしまつた。何とか反論しようとするのだが、いかんせん、ウェルの方は自信満々過ぎて、反論するには随分な氣力や論拠が必要だつた。

黙つてしまふと射殺されるような気がしたので、コルトが必死に次の手を考えていると、

「じゃあ、より公平になるよう、クジで好きな武器を決めよつじやありませんか」

ウェルがとんでもない提案をした。

「そうですね……実は、こんな事もあるうかと、クジを用意してきました。赤い丸がついている棒と、そうでない棒。赤いのを引いたほうは、このデス・ロイドを。そうでないほうは、拳骨一つで戦う事にしましょう」

「な、拳骨一つだと！？」

「コレ相手では、他のどんな武器が有つても無駄です。さあどうぞ、引いてください、一六番さん」

「一〇番っ！ よつし、じやあ……」

「コルトが勢い良く棒を引っ張る。棒の先には、赤い丸がついていた。

「やつた！ やつた！」

コルトは大喜びである。一方、ウェルはやはり表情も変えず、残ったクジをしまった。

「では、貴方はコレをどうぞ」

「ウエ、ウェル、ダメじゃない、止めなさいよ、死んじゃうわ」

「コーデュが思わず言つと、ウェルは僅かに笑んで言つた。

「僕が死ぬとしたら、それもまた運命。気にしないで」

「運命つて……ちょっと、ウェル！ 一緒に旅に行くって、約束だ

つたじゃない！」

「へえ。コーデュが了承してくれていたとは、初耳だ」

ウェルが言つと、コーデュは慌てる。

「まだ行くとは言つてないけど、行こうかなあ、ぐらいは思つてるの」

「張り合ひがないなあ。ここで約束してよ。どうせ僕は、あの……

一四番さんの……」

「一〇番だと言つてるだろ？ が！」

「手にかかるて死ぬ身なんだから、夢ぐらい見せてくれてもいいだろ？ が！」

「……判つた。私、貴方と一緒に旅に行く。何処まで一緒になるか判らないけど、私も探し物を探す旅がしたいの」

「ありがとう」

ウェルは今までにない満面の笑顔を浮かべて言つた。

ボルタ工房の前には相変わらず、人だかりが出来ていた。しかし、

その一角が抜けている。コルトの正面だ。

物騒な武器、デス・ロイドを向けられて平気な人間は居ない。決闘の巻き添えを食つてはいけないと、ウェルの後方には一人も居なかつた。

コルトは笑みを浮かべて、デス・ロイドを持つている。
「決闘は、一〇歩下がつて振り返るのがルールでしたね」
「そうだ！ 貴様もそれぐらいはわきまえていいようだな」「では、さつそく始めましょう」

片や一四三mm砲、片や拳骨。

あまりにも不自然で、結果は火を見るより明らかに決闘だつた。

「では

ウェルが後ろを向いた。コルトも同じように後ろを向く。

「一步

ウェルがあつさつ一歩田を踏み出した時、コルトは恐ろしい事に気づいた。

「お、重つ」

デス・ロイドは、とんでもなく重かつた。車輪が付いているとはいえ、何せ重さは一・五トン。歩くのも大事である。

「一步

「ま、待て、待てつて」

「口口、口口と重い機銃を押しながら、コルトは必死であつた。そして、更に恐ろしい事に気付いた。

どうやって振り向くんだ。

この調子だと、振り向いている間に、ウェルが側に来てしまうかもしれない。

コルトは必死に考えた。悩みに悩んで、そして名案を思いついた。（そうだ、片側の車輪に、石をかませよう。やつしたら、押すと回転するはずだ）

そして、その事で頭がいっぱいになつてしまつた。

「九歩」

そういひして、内に、彼らは所定の歩数を終えよつとしていた。

「十歩」

ウェルは十歩田を踏み終えると、すぐに振り返る。コルトも、車輪の片側に石をかませ、グッと全力で押す。見事に機銃は回り、銃身がウェルを捉えた。

勝つた！ コルトは確信して、次の瞬間、気付いた。

「……あれ、これ、……どうやって使うんだ」

これは強そうだ、と見た田に騙されて、コルトは気付かなかつた。その機銃の使い方も知らない事に。

「あれ？ あれ？ こ、これが？ これが？」

ボタンやレバーを押したり引いたりしてみるが、機銃は沈黙を守つていて。そういうして、内に、ウェルが近寄つて来ていた。

「いい事、教えてあげましょうか」

「お、コノの使い方か！？」

「ええ」

ウェルはニツクリ笑んで言つた。

「それ、レプリカなんです」

「え」

そして、コルトが呆けている間に、ウェルは全力で彼にアッパーを喰らわせた。

ウェルがこの一週間で荒稼ぎしたとは言つても、本物の機銃を買えるほどの金額ではなかつた。そこでウェルは、コーツロット社の経営する美術館に赴いた。

そして半日、広告を打つ事と引き換えに、デス・ロイドのレプリカを貸してもらつていた。第一、本物の軍用兵器が民間人に売られるはずも無い。良く考えれば判る事だ。

「どんな時代でも、本物を見極める審美眼は、貴族、庶民に隔たりなく必要なのです。そして無知であると、どれほど良い物を持つても意味が無い。その典型例ですね」

ウェルはそう言って、ポケットから残りのクジの棒を取り出した。赤い丸が書いてあつた。

赤い丸が書いてあるた

「コーデュが呆気に取られていると、ウェルは一ツコリ笑つて言つた。

「やあ。一緒に旅に出る、約束だつたね」

「だ、騙したわね！？」

「騙していない。極自然に、あの状況で僕は死んでいただろう。嘘はついていない。もし君が騙されたと感じるなら、それは君が余計な憶測をして勘違いしたに過ぎない」

「ウエル！」

ルトが用を覚ました。

「う……ま、負けた……」

ロルトは顎を撫でながら、痰田で詰つた。

「よして下さーい。僕は彼女を嫁こするつ毛りよ

代わりに、要求していいですか」

何なりと言うがいい。男の約束だからな……」

「ドニーが二、三の悪党を連れて、お嬢の名前を覚えて、お嬢には

コルトが眉を寄せると、ウェルは言った。

「今日から、貴方は僕の部下になつて下さい。まあ、いわゆる一つ

「一、拘!? 拘だと、貴様!?」

「決闘に負けて、命があるだけマシでしょう」

「……あれ、ちょっと待って。じゃあ、もしかして……」

「一テコが嫌な予感に尋ねると、ウエルはきつぱりと言つた。

「僕ら三人で旅に出ます」

よりによって、このストーカーと！？

コーデュは驚き、そして力いっぱいウェルを睨みつけたが、彼はニコニコ笑っているだけだった。

コーデュはこの口ほど、自分の無表情な顔を呪った事は無かつた。

4 旅立ち

ロキシーヌ村に、今日も朝が来た。

村全体にとつては、いつもと変わらぬ朝だった。人々は目を覚まし、いつも通りの生活を始める。それだけだ。
しかし、その三人だけは違った。

「……」

未だ不服そうな顔をしているのは、コーデュ。もつとも、どれだけ笑顔を作つても無表情なのだから、不服そうに見えるのは、見る方の勝手かもしない。

けれど、確かにコーデュは不服だった。

今日のコーデュは、黒いミニのワンピースを着ていた。日差し避けにフードつきの白いカーディガンを羽織っている。ヒールの付いたブーツを履き、手にはいつもの、全財産の入った皮のトランク。

「それで旅をする気？」

露出の高い服に、多少驚いたと見えるウェルがコーデュに尋ねる。

「そうよ」
コーデュは素っ気無く返す。「すごいね」とウェルは感心して言うが、彼の方も相当だった。

オフホワイトのタートルネックの上から、皮のベスト。意味も無くベルト、そこに大きめのウェストポーチ。だらけたズボン。安物の革の靴。

今時こんな「たびびとのふく」みたいなのが、何処で買つてきたのか。コーデュがそのセンスを疑う。第一、額に「ロイヤルホテルミュール」と書いてあるのに、どうして人の事を言う氣になるか。何しろ騙された事に怒っているコーデュであるから、何もかもが腹が立つて仕方ない。

おまけに、

「おおおお、レディ！ 深く美しい！」

語彙力に欠けた叫びを上げる、コルトが隣に居るのだ。

コルトは白のフリルブラウスをしっかりと、赤いベルベットのズボンに押し込んでいる。時期はずれな黒いボア付きのコートを羽織り、「今日のテーマは闘牛士」とばかり。しかし、何故かウェスタンブーツ。さらに彼は大量の荷物を持っていた。リュックが三つに、トランクが二つ。いつそ一輪車にでも乗せたほうが利口そうな量だった。

「暑くないの？」

秋になつたとはいえ、日中はまだ暑い。

「コーデュガとりあえず忠告を兼ねて尋ねたが、「美観の前には感情など消え失せてしまつのか、レディ」と意味の判らない返事しかもらえなかつた。

熱中症で倒れても放つておこう、とコーデュは静かに考える。

「うーん、どうからどう見ても、不審な三人パーティーだね」見送りに来たフィリエが、面白そうに言った。

それはそうだ。額広告青年と、露出度高めの美女と、厚着の闘牛士もどきである。これほど意味不明な連中、そうはいないだろ？。「からかわないで下さい。ホントに不安なんですから」

「まあまあ。頑張つて来なよ、コーデュ。前も言つたけど、飽きたらここに帰つて来ていいからね……あ、そうだ。これ、餓別だよ」

フィリエはそう言うと、髪飾りを差し出してきた。大きな翡翠の付いたかんざしだ。黒いレースが括り付けられていて、上品な仕上がりだつた。

「餓別？」

「お守りみたいなもんさ。あたしが丹精込めて作つたんだからね、大事にしどくれよ」

「でも、そんな、戴けないです」

「いいから、いいから。貰えるモンは貰うのが、女の賢い生き方さやんわりお断りして焦らすのは、男だけにしどきな」

フィリエはそう言つてコーデュに近寄ると、その巻き上げた髪に
かんざしを差し込む。金の髪に翡翠の光が映えた。

「夢が叶うよ、お祈りしといたからね。無くさないでおくれよ?」

「ありがとうございます。お礼はまた、帰つて来たら……」

「そんなのはいいよ。それより、体を大事にね。無理はするんじゃないよ」

「はい。短い間でしたけど、お世話になりました」

そして三人は、ロキシー村を出て、更に西へと旅立つた。

「そりいえば貴方達、同じネックレスをしてるのね」

街道をのんびりと西に向かいながら、コーデュはふと、ウェルとコルトの胸元に、同じネックレスがあるのに気付いた。

元々風体がとんでもないので今まで気付かなかつたが、男がネックレスというのも珍しい。それは銀の一連ネックレスで、一つだけ青い宝石がついていた。

「コーデュの言葉に、ウェルが「ああ」と頷いて答える。

「王権所持者の証だからね」

「それが?」

「そう。一五歳を超えた王子、王女は皆身に着けてるよ。一目でお互いがライバルだと判るようにね。何せ、三〇人以上子供が居るから、顔も名前も、ましてや番号も覚えきれないし」

王子と王女達には各々、生まれた順に番号が振られている。つまり、「コルトは一〇人目の、ウェルは二三人目の子だ。現国王に「王たる証」を提出するまでは、原則としてその番号が王位継承権の順位となる。よつて番号は実際の順位には対応していない。

「ネックレスがあるから、僕もこの人が兄弟だと判つたんだ。でないと兄弟と気付きもしなかつたろうね」

ウェルはコルトを指差して言った。どうやら名前や番号を覚えるのも、言い直されるのも面倒なので、「この人」にしたらしき。

「そうよね。ウェルとコルトって、全然似てないもの。すれ違つたつて兄弟とは思わないでしょうね」

ウェルとコルトは、人となりもさるものながら、容姿も全く似ていない。

ウェルはクセのある銀髪に赤い瞳、背丈は低く、どちらかといつとのつぱりとした顔立ちだ。

一方のコルトは、力強くまつすぐな金髪緑眼で、ひょろりと長く、いかにも性格の悪そうな顔までしている。

ウェルは一見貧乏そうだし、コルトはどんなに貧困に喘いでいても、外見だけは裕福極まりなさそうだつた。

「それはそうさレディ！」ウェルと私は、異母兄弟だからね

コルトは誇らしげに胸に手を当てて言つた。

「私の母ウエリードは、父上の八番田の側室なんだ。そこのみみたいな一五番田とは訳が違う」

「……側室の時点で、そんなに誇れる事じゃ無いような気もするけど」

「う……し、しかし、ウェルよりも正室に七番も近い」

コルトは少し自信が揺らいだつたが、すぐに立ち直る。

「それに、私の母上は貴族の生まれ！ ウェルのところは、平民」「平民？ ……あ、でも、なんとなく判るかも」

じゃないと王子なのにアルバイトなんてね、ヒーローは少し面白そうに言つた。そしてはたと氣付く。

「……そういうえば、コルトはお金、どつしてゐる。馬鹿みたいに使つてるけど」

「うん？ ああ、我々王の子は、全員同額を国から支給されているんだよ、レディ」

「通称、王族給付金。税金から取るんだけどね」

ウェルが補足する。

「僕らは生まれてきて、王の子だと証明されると、一定の金額を最初に貰う。それをどう使うかは、親と子供次第。勉学につぎ込む人

も、芸術につき込む人もいるけど、普通はこの人みたいに、チビチビと遊んで食い潰していくね

「嫌な言い方をするな。私が放蕩息子のようじゃないか」

その通りだと思つ。『一デュは言いたかったが、一応言わないでおいた。

「そういう貴様はどうした。何故、王子だといつのに、そんなけつたいな事をする」

「僕の事は放つておいて下さい。僕は元からある金銭に甘えたくないんです」

「変わつてゐるな、ウェルは」

「良く言われます」

なんだかんだ言つて、この兄弟は仲がいいのかもしけない。決して仲睦まじいとか、そういう類ではなくて。そう、腐れ縁とか、凸凹コンビとか、そんな。

『一デュはそんな事を考えながら、一人を見ていた。

「そのうち、金稼ぎが主体になるんじやないか。旅に出る事よりも「ゴルトが揶揄すると、ウェルは「可能性は大いに有ります」と頷いた。

「夢や志を持つて、その場しのぎの金策に没頭し、気付けば一生が終わつてゐる。大いにありえる事です。ですが、簡単に予防する事が出来ます」

「ほう?」

「夢を幻想に変えない事。夢を口実にしない事。やりたい事があるなら、今から始める。金策の果てではなく、現在進行形で夢を追う。それだけでも違うと思いますよ。何せ、金が無いのに叶う夢なんて、殆ど無いですからね」

「……そうね、お金は必要ね……」

ウェルの言葉は『一デュの中に響いていた。

どんなに大きな夢も、志も、腹を膨らませてはくれない。目指す場所があるからこそ、働くねばならないが、ふと気付けば夢は幻想

へと変わり、既に手の届かない場所にある。

「コーデュはそういう人々を多く見てきた。それだけに、自分がそれと同じでないか、疑問に思う。不安にさえなる。

「ああ、レディ。お金に困る事が有つたら、私にいつでも相談しておくれ。私は君のためなら全財産を投げ打てるよ」

「じゃあさつさと飢え死にして下さいよ」

「お前は関係ない、これは私とレディの問題なんだ。夫婦だからな」

そして相変わらず、コルトは勘違い全開だった。

コーデュは苦笑して、首を振る。

悩んでも仕方が無い。考えない事は良くないが、悩んでも意味がないのだ。

とりあえず、道があるからには、進んでみるものいいかもしねない。

「ところで……その王族つて、多いの？」

「今の国王の子供は、現在三一人。その全員に給付金が配られているんだ。国民としてはたまたもんじゃないだろうね」

「三一人？……子沢山ねえ」

「今のが歴史上、一番子供が多いって話だよ」

「父上は愛が深く、そして広いからな」

「そうでしょうか？　ただの女好きのようにも思いますが」

「父上の悪口を言つくな、ウェル」

道中ずっと言い合いを続ける兄弟と共に、コーデュは街道を進んで行つた。

その日の夜は、隣村のトウエルで宿泊する事になった。

トウエルは小さく、長閑な農村だ。花畠が名物だそうだが、決して大規模ではなく、小さなものが数個あるというだけだった。特に娯楽施設なども無く、宿屋も一つしかない。ウェル達はそこに泊まるしかなかった。

宿は小さな酒場と軒を連ねていたので、彼らは夜になると、訪ねてみた。

木で作られた質素な酒場で、客の姿はまばらだった。マスターが暇そうにグラスを磨いている。

「一デュとコルトはテーブル席に座り、ウェルは一人でカウンターに腰掛けると、マスターに切り出した。

「ここら辺りで、お金になりそうな話は無いですか

「さあ……静かな村ですかうね。ところでお客さん、そのおでこのは、なんですか」

怪訝そうな顔のマスターに、ウェルは親切丁寧に、自分の事業内容を教えた。

「ははあ、額に広告をね。それは嫌でも目に入りますね。いや、上手く考えたもんだ」

「どうですか。明日にでも、広告を打ちませんか」

「面白そうですね。試しにお願いしてみようかな。近頃はお客様めつきり減つてね」

マスターは嘆息して、ウェルに注文を尋ねた。

平和な世の中である。

冒険旅行記では、勇者が悪い魔物を退治して報酬を受けたり、洞窟に入つて財宝を見つけたり、王様に感謝されて宝物庫を開けてもらえる、などと書いてある。

しかし、それは物騒な時代の話だ。

平和という区切りがあまりに長く続いたこの大陸は、魔物の脅威を排除し、同時に一攫千金や、名を挙げる夢も失っていた。

冒険者は旅に出るため、金を稼がなくてはならない。中にはアルバイトで何年も貯めた金で、数週間の冒険旅行を満喫する者も居るという。

それはウェル達も例外ではなかつた。

他の王子はともかく、ウェルはあくまで「王族給付金」という物

を使おうとした。そうなれば、おのずと資金が必要になる。ウェルはその資金を稼ぐために、額に広告を打つ事にしたようだつた。

しかし、何も資金繰りに悩んでいるのは、彼らだけではない。長い平和の末に市民全体が、特に大きな夢も持たないが、大きな不幸も無く、そして常に金銭に余裕は無い、という生活を送つていた。

「だからね、お金儲けの手っ取り早い話なんて、やつぱり無いですよ。こんな辺鄙な村じや、特にねえ」

マスターが言うと、ウェルは頷いた。

「いや、いいんです。なら、広告で稼ぐだけですから」

「でも、なんだか酒場のマスターとして、ちょっと申し訳ないな……あ、そうだ」

マスターは何かを思い出したようで、顔を明るくさせて言った。
「長老会にね、苦情が出てるんですよ。その事実関係を調査するつてのは、どうですか。小金くらいなら報酬として貰えるかもしれませんですよ」

「苦情、ですか」

「そうです。この村の裏手に、山があるんですがね。そこに、一人の男が住んでるんです。その男が夜な夜な、怪しい儀式をしているつて噂が流れていますね。不気味でしょう。残り少ないモンスターを捕獲しては、連れ帰っているだとか。色々ね」

「ほう。それは不審ですね」

「そうでしょう。本當かどうかを確かめて報告するだけでも、長老会としては喜ぶんじゃないですかね。報酬も多少なら、私のほうから頼めますよ」

「いりますね」

ウェルは頷いた。

「明日、行つてみます」

しばらくしてウェルは料理を持つてカウンターを離れた。テーブルへ向かうと、既に座っていたコルトとコーデュも、定食を食べている。ウェルも料理を置いて加わった。

「明日、この店を宣伝する。それと、山に登る」

「山？ どういう事？」

コーデュが尋ねる。ウェルはオーバングラッセをつつきながら答えた。

「宣伝の給金だけでもかまわないけど、手に入るお金は多い方がいいからね。……不審な男性が、山に住んでるそうだ。男性の素性を調べてくれれば、多少の報酬はあるらしく」

「は。ウェルは金、金。金の亡者だな。世の中、金ばかりではないぞ。愛だ、愛」

「コルトが笑うと、ウェルは横目で見ながら、「じゃあ、貴方の全財産を下さいよ」と言った。

「な、そ、そんなのは無理だ」

「どうしてですか。愛でお腹が膨れるんでしょう。金は要らないんでしよう。僕に下さい」

「極論するな！ 私だって金は必要だ」

「必要な金を親に頼る貴方と僕と、どちらが金の亡者かは不明ですけどね」

「なんだとあ」

「やめて、二人とも。いちいち喧嘩しないで」

コーデュは両者の争いを止めて、溜息を吐いた。

本当にこの一人は似ていない。どこまでも正反対で、かつ、相性が悪い。どちらも一步も譲りずに、自分の理想を貫いていくタイプだ。

ふとコーデュは、自分はどちらでも無いと気付いた。金も無いし、愛も無い。そして理想に向かう強い意志も無い。

「……」

「Jの変な男達より、自分はもつとつまらない人間ではないか。そんな事を考えていると、

「そういえば、『コード』。そのピアスは立派だね」突然ウェルが言った。『コード』は一瞬反応に困つたが、やがて「ああ」と左耳のピアスに触れる。

大粒の赤い宝石のピアスだった。宝石の中央には、鳥のような金の筋模様が入つている。高価そうなピアスだったが、左耳にしか付けられていなかつた。

「さては、ウェル。ブランド物だから高く売れそうだとか、そんな事を言いつもりだな」

「違いますよ。ただ……どこかで見た事があるような……と」

「それには同意見だが、お前にも見覚えがあるなら、きっとブランド物だ」

「勝手に決めないで。これは何でもないの。いわゆる、親の形見て奴だから」

「コードが静かに言つと、一人は目を丸くして、そして気まずそうな顔をする。

「おい、余計な事を言つて、彼女を悲しませるな」

「誰がブランド物と決め付けたんですか、誰が」

「大丈夫、気にしてないわ。物心付いた時には、もう親が居なかつたから、別に悲しくも無いの。このピアスだって、気付いたらついてたし、親の形見だつて思つてるだけだし」

「そうか……」

ウェルとコルトは気まずそうに顔をふせたままだ。なんだかんだ言つて、親の居ない境遇というものを想像も出来ないのでどう。

「ところで、どうしてもその山に登るの？ 私はあんまり……話題を元に戻すと、ウェルも若干安心した顔で応える。

「別に、行きたくないのは構わないけど。その場合、働いてもらわないと」

「ええ？……もしかして、おでこに……？」

「それ以外に日給……この程度、手に入る職があれば、それでもいい。僕の給料に期待してちゃダメだよ。それはただの極潰し。仲間とこうからには、お互い協力しないと」

「……じゃあ、ついていく……コルトは？」

「私もついていこう。社会見学だ。ルグネスも暇そつだし」

「ルグネス？」

「聞いた事の無い単語にコーデュが首を傾げると、コルトは「ああ」と気付いて言う。

「私の護衛だ。平和な時代とは言え、王子が一人で歩くのは危険だからね」

「護衛？何処に居るの？」

「常人に見つかれないよう、いつも隠密行動をしている。まあ、注意深く私を見ていれば、そのうち見れるかもしぬないが。とても気配の薄い男でね。私でも時々気付かない事がある」

「……それって護衛の意味、あるの……？」

「それが困った話でね、レディ。こう平和な世の中では、全く出番が無い。彼も不服だと思うんだ。だから多少無茶をして、彼にも仕事をさせてやらないと、ノイローゼになつても困るからね」となれば、コルトはそのルグネスなる護衛をハラハラさせるためだけに、山を登る気のようだ。

「こいつは相当、困った王子だわ。

「コーデュが改めて感心して、それからウェルを見た。

「……で、ウェルは？」護衛

「僕は、護衛を雇う金がもつたないので、解雇しました」

「こ、こら、ウェル。何を勝手に。父上直属の派遣員だろう」

「他の兄弟にでも使い回しするでしょう

「しかし、それで、王宮とのやり取りはどうしてるんだ」

「ああ……母上が、監視員を雇っているようで……いつも同じ人が、ウロウロしているのから……一応、見張られてはいるみたいですよ

彼が勝手に王宮に報告してゐんぢゃないですか。
ウェルはあつけらかんと言つてのける。

「でも、……ウェル。一人旅つて、危ないんぢゃないの？」

コーデュが思わず尋ねると、ウェルはきょとんとした顔をして、
言つた。

「何言つてるの。そのための、君じやないか」

5 裏山にて

秋を迎えるとしている山は、まだ青いが、少しずつ暖色を帯び始めている。

人の手は入っているが、過保護ではない。道は有るが、歩くのがやっと。

実のなる木は、村の近くに。少し奥に入ると、雑木は杉へと姿を変える。足元はふんわりと、羽毛のような感触。

三人はトウエル村の裏山に来ていた。皮のブーツに腐葉土が付くのを嫌がりながら、コルトは看板を見つけて読み上げる。

「熊出没注意。ルグネスが喜びそうだ」

「その護衛さんって、強いの？」

いつものブーツはヒールもあるし、山歩きには適してない、とコーデュは安物のブーツを買って履いていた。選択は正解だったと言えよう。フラフラと足元がおぼつかないコルトを最後尾に、ウェル達は順調に山を登っていた。

「強いか。試験は好成績で通過した」

「まあ、試験と実戦は、違いますからね」

「悪口を言つと、ルグネスに殺されるかもしれないぞ」

「その後、ルグネスさんも殺されますよ、母上に」

山奥でもこの兄弟は言い争いを止めない。それはそれで仲がいいのかもしれない、とコーデュは思う。

「う、レンディア叔母様か……叔母様とルグネスだと……判らないな……」

「どういう王妃様なの、それ」

「いや、とにかく凄いのだ、ウェルの母は。ほんとに、もう」

「へえ……」

何がどう凄いのかは全く判らないが、とにかく凄いらしい。コルトの表情から見ても判る。

「ともかく、ルグネスは私がまだ幼い時から、ずっと一緒に暮らして来た男なのだ。実の兄弟のようなものだとさえ思っている」

「……ところで……そのルグネスさんは、貴方が窮地になると来るんですか」

「来るだらうな。でないと、護衛の意味が無い」

「へえ……」

「なんだ、何を疑つている」

「コルトが不愉快そうに顔を顰めると、ウェルは言った。

「だつて、貴方の後ろに、熊さんが居ますよ」

「何？　は、冗談はよせ。お前も下手だな、人を脅かすならもつと、大きなリアクションで……」

コルトは笑いながら振り返り、そして、
熊と目が合つた。

「あ」

「熊さん」

コルトは笑つたまま、コーデュは無表情のまま固まり、そしてウェルはその間にもそそくさと逃げる。

ややして、熊が唸り声を上げた。その声に、やつとコルトは現状に気付く。

「うわあああああああ、助けてくれええ――、ルグネス――
！」

コルトは叫んで走り始めた。その後ろを、熊が咆哮を上げて駆けて行く。コーデュはその間に、木に登った。ウェルがそうしていたからだ。

「あ、あれ？　あれ？　ルグネス？　ルグネスさん？」

コルトは逃げながら名を呼んだが、護衛らしい人物は現れない。その間にも、熊はコルトを追い掛け回している。

「ルグネスー！　てめえ、クビだー！」

コルトは叫びながら他の二人を探した。全力疾走しながら上を見ると、二人は木の上で傍観に徹していた。

「うおおーい、ウェル！ コーデュ！ 助けてくれ！」

コルトが必死に訴えるが、ウェルもコーデュも実に冷めた様子であつた。

「貴方が襲われている隙に、僕達は逃げ延びます。せいぜい頑張つて生きて下さい」

「ななな、何を言つ、薄情者つ」

「愛の世界を作るんでしょう。まあ、愛するコーデュを守るため、熊と戦うんだ！」

「そりやあ、私だつてな、コーデュのためなら死ねるが、なんかこれは違う氣がするぞ、なんか！」

「コルトが叫ぶ。しかし、余所見をしたのが災いした。コルトは木の根に脚を引っ掛け、盛大にすつ転ぶ。

「ばぶべ！」

腐葉土に頭から突っ込んだコルトは、慌てて起き上がるが、時既に遅し。コルトの眼前に、熊の顔があつた。

「ひつ」

「いよいよコルトも終わりか……と、ウェルがコーデュに目配せる。

コーデュはスッと右手を伸ばし、熊に狙いをつける。方程式を組立て、その式がコーデュの手の平から漏れ、僅かに光を発しそう。

コルトの背後から、小さな黒犬が飛び出した。黒犬は熊の鼻先に噛み付く。

熊は咆哮を上げて、犬を振り払おうとした。が、熊が腕を振ると、黒犬の姿は霧散する。

「……召喚獣」

「召喚獣だつて？」

「コーデュの呴きに、ウェルは驚いた。となれば、近くに召喚師が居るという事だ。

更にどこからか黒犬が現れた。良く見ると、それはいわゆる「犬」

ところの種族の生き物では無い。毛並みは霧のように揺れ、頭部には三つ田の金の瞳。

霧の体を持つ、牽制を主たる用途とされる召喚獣……フエロネスだ。

フエロネスは飛びついては消えを繰り返し、ついに熊を追い払った。熊の姿が見えなくなると、フエロネスそのものも姿を消した。

「……た、助かった」

体中に土や落ち葉を付けたコルトが、安堵の溜息を漏らす。安全である事を確認して、ウェルとコーデュは木から降りると、コルトに歩み寄った。コルトは汚れを叩き落としながら、ウェルを睨みつけて叫ぶ。

「貴様、私を見殺しにしようとしたなー？」

「滅相も無い。人を悪党みたいに。的にしようとした事は否定しませんが」

「充分な悪党だ！」

「『めんなさい、コルト。攻撃魔法を使つつもりだったんだけど、やつぱりのが安定しないと、当てにくくて……』」

「本当にかい！？ 本当に助ける気、あつたのかい、レディー！？」

さすがにコルトもこの時ばかりは、惚れた女に詰め寄った。コーデュは必死で頷く。

「何せ、こんな時代でしょ。私も攻撃魔法は取得してるけど、殆ど使つた事が無いの。式を組み立てるのはすぐ出来るんだけど、実際に撃つのは結構、難しくて……特に、標的が動くと誤射する可能性も高いし、下手したら、コルトを苦しまないようになあの世に送られたかも……」

「そ、それはそれで、レディの手にかかつて死ねるんだから、いいが」

「そこはいいんですか」

ウェルが思わずつっこむ。どうもコルトが怒っている部分は、ウェルのために死になつた、という点で、コーデュの事はいい

らしい。

「全く、実の兄を餌にするとは……なんて奴だ。お前は本物の守銭奴だ。冷酷非道だ」

「なんとでも言つて下さい」

コルトはしきりに罵言を浴びせていたが、当のウーハルは全く気にかけていないようだつた。

「第一、ルグネスの奴、こいつのために雇つているといつのに、何をしているんだ。後で痛い目に合わせてやる、おのれえ……」などとコルトは呴き続けていた。

ど。

「皆さん、大丈夫でしたか」

三人に声をかける者があつた。

見れば、壯年の男が立つっていた。暗い茶色のローブに身を包んでいる。クセのある、手入れをしていないような黒い長髪に、少し伸びた鬚。腰には皮の袋、右手には櫻の杖。足元には、先ほどのフエロネスが一匹。

「……助けて下さったのですか」

ウーハルが尋ねると、男は苦笑して答えた。

「この季節、熊達は少し気が立つてましてね。軽く齧してやれば落ち着くんですが。私も困つてるので、フエロネスに見回りをさせているのですよ」

「という事は、貴方は、召喚師ですか」

「はは……自称、ですがね」

ここではまた、熊が出るかもしません。狭いですが、私の住居においてなさい。

男はそう言つて、三人と共に、山を登つた。

熊に襲われた場所から、そう遠く無い場所に、その小屋は有つた。丸木で作られた、こじんまりとした小屋だった。母屋に、納屋が一つ。畑に井戸。その付近を、やはりフェロネスが何匹か、歩き回

つていた。番犬として使っているのだろう。

召喚術は、魔術としては邪道の部類に入る。

シユレグ一族が、方程式を編み出し、その末に開発したのが、一連の召喚術である。

召喚、とは言うが、実際には何かを呼ぶ訳ではない。

元となる生物と、起動に必要な物質を魔術的に結合する。そうして出来上がったものが、召喚獣と呼ばれているに過ぎない。いわば、生物を交えた鍊金術の事だ。

例えば、フエロネス。彼らは犬と、闇鉱石、蝙蝠等を合成して作られる。合成時に、彼らの神経及び精神に、ある種の式を書き込めば、術者の思い通りに動く駒になる。

ただ、下等動物の脳に書き込める式には限りがある。複雑な動きをさせるには、要領が足りない。一般に、 $I_f \dots ($ であれば、 $\times \times$ をする) といった式を、数個組み合わせる程度。残りは自由領域になる。

それは戦時下においては非常に有効な魔術であつたが、平時になると、途端に動物愛護の観点から非難を浴びる事になつた。何せ召喚術の最高峰は、人間を材料とする事も有つたといふ。政府は公に彼らを弾圧し、召喚術をみだりに使つてはならぬ、と法で説いた。

そして召喚術と召喚師は、時代の波の中で、消滅していくのだった。

ただし明確な罰則等は無いため、研究所でも未だに取り扱つている。生活のため、密かに使い続けている者も多少は居るらしい。そもそもの一人なのだろう。

「私も、召喚師の子として生まれて、色々と大変でした。両親は何か魔術研究所に入れたんですが、私はどうにも落ちこぼれでしてね。そりゃあもう……苦労しましたよ」

男はベイトリオン・クレッセルと名乗つた。

召喚師の血を引き、召喚術を会得したが、魔術研究所に入れなか

つたため、社会からもつまはじきにされた、と彼は語る。

「魔術師でさえ、近頃は民間に通用しませんからね。召喚師なんてなおの事で……仕方なく、こうして山ごもりをして、静かに暮らしているんですが……それでも、やはりダメなんでしょうかね。こうして見知らぬ人が、わざわざ訪れるという事は……」

ベイトリオンは苦笑しながら、三人を家の中に招いた。
小さなキッチンと、リビング。狭い母屋には、テーブルが一つと、椅子が四つ。

それだけの家だった。ウエル達は椅子に座らせてもらう。

(一人暮らしみたいだけど、それにしては椅子が多いわね)

「コーデュは四つも有る椅子に首を傾げたが、普通家具屋はセットで売るし、多めに買つてしまつただけだらう、とそれ以上は疑問に思わなかつた。

ベイトリオンは「コーヒーを用意しながら、ウヘルに尋ねた。

「それで、トウエル村の人々は、私にどうして欲しいと？」

「随分と察しがいいですね」

「私に会いに来るのでもない限り、あんな奥まで人は来ないですからね。それにこれまで何度も何度か、あちこちの村から追い出されていますから。そういう気配は良く判る」

「……安心して下さい。僕らは、事実関係の調査に来ただけです」「調査？」

出来上がつた「コーヒー」が、カップに注がれる。

「はい。彼らは貴方がどういった人物なのか、気になつているようです。自分達に害が無いようであれば、このままの状態を維持するつもりだと思いますよ」

「害ですか」

「……妙な儀式を、行つてているとか。モンスターを拾つているとか、そういう噂が流れているようで」

「ああ」

ベイトリオンは小さく笑つて、椅子に腰掛けた。ついでにラスク

の入ったかごを、テーブルに置いて置つ。

「あながちテタラメでもないですね。儀式は、召喚術の事でしょう。拾つてるのは、モンスターではありませんが」

「では、何を?」

「怪我をした動物をね、保護しているんです」

ベイトリオンは、窓から納屋を指差して言った。

「助かる範囲の動物は、一度保護して、その後で自然に戻していくます。助からない動物は、可能な限り、召喚術で蘇生させているんです」

「何故?」

「山暮らしは、一人では寂しくてね。それに、召喚獣は、私を自然の驚異から守つてくれる。お互いの利益になるとと思つてしているんですけど……」

「そうですか……」

「まあ、疑われても仕方ありませんがね……召喚術などを使つていると」

「ですが、私はここで静かに暮らせれば、それでいいと思つているのですよ。」

ベイトリオンがそう言つと、ウェルも頷いた。

「では、その旨をトウエル村に伝えておきます。きっと彼らも、貴方を追い出したりはしないでしよう」

「ありがたい」

ベイトリオンは深く頭を垂れて、それから尋ねた。

「ところで、どうして貴方は、額に……?」

「ははあ。冒険旅行に。それは羨ましいですな。いや、若いという事は良いですね」

しばらくの間、ウェル達とベイトリオンは話をした。あくまで、王子云々の話は伏せて、ウェルは旅の目的と、広告収入の事を話す。その間、コルトは珍しく無口に、コーヒーを飲むだけだった。

「今の時代、何をするにでもお金は必要ですしね。逆に言つて、お金さえあれば、多くの事はどうにでもなる」

「……そうですね」

ベイトリオンは苦笑しながら頷いた。ウヘルの話は金の事ばかりで、ベイトリオンでなくともウンザリするだろう。ウヘルもその自覚はあるようで、特に気にしていない様子だ。

三杯目の中二度を飲み干して、ウヘルは「さて」と立ち上がった。

「つまらない話ばかりして、申し訳有りません。長居をしてしまいました。僕らも、日が暮れるまでには帰らないと」

「いえいえ、いいんですよ。私も久しぶりにおしゃべりが出来て、楽しかった」

ベイトリオンはにつこつと笑つて、コードユを見る。

「美しいお嬢さんにも会えましたしね」

「コードユはその視線に少し困つたが、小さくおじぎを返す。

「清楚な方だ。どこか品格を感じますね。そのピアスも、高価そうですね……もしや、何処か名家のお生まれでは?」

「いえ……私は孤児でしたので……」

「そうですか、それは失礼を……。皆さん、お体に気をつけて、旅行を楽しんで下さいね」

麓まで、フェロネスに送らせましょう。

ベイトリオンはそうして別れた。

フローネスが前を歩いている。コラコラと風に揺れる、紫の体に案内されながらの帰り道。

「コードユは、本当に名家の生まれだつたりしてね
ふいにウヘルが呟いた。コードユはきょとんとして、ウヘルを見

る。

「どうして?」

「エルフは貴族が多いし。確かにそのピアスは高価そつだ」

「よしてよ。第一、仮にそうだったとしても、何の意味も無いわ。私は孤児として育つたし。今更何も変わらない。私、もう一九だもの」

「コーデュはそう言って、溜息を吐いた。

物心付いた時にはコーデュは孤児院に居た。

メルティーナ王国の偏狭。小さな田舎村に、彼女は捨てられていたらしい。国を挙げて魔術研究を行っているメルティーナに捨てられたのは、コーデュにとつて幸運だった。豊かな時代の孤児院である。学校にも行かせてくれたし、食事も部屋もきちんと用意をしてくれた。

コーデュは孤児院に来た時、既にピアスをしていたという。魔術の基礎は既に出来ていて「これは」と思った院長が、魔術学院に進学させてくれた。

瞬く間に全課程を終え、コーデュは国立魔術研究所に進もうとした。しかし、そこでは孤児という境遇があだとなつた。彼女は履歴書でふるい落とされ、試験すら受けた事は出来なかつた。

それからしばらくなは、親が居ないという事を憎み、引きこもつていた。

ある時、友人も孤児と言う理由で職が見つからない、と泣きじやくつていた。その時に、コーデュは多くの事を考えた。

理不尽という言葉に、甘えてはいか。

孤児院は孤児である限り、その入居者を保護してくれる。コーデュは一〇歳を迎えるまで、職に就かなくても、食うに困らない。何も出来ない、何もさせてもらえない。そう思い込んで、甘い殻の中に閉じこもつているだけではないのか。

コーデュは友人と約束し、もう孤児院に戻らない事を決め、そして職を探した。

境遇を乗り越えてこそ人生ではないか。境遇に甘えていてはいけない。もう少し先に進んでみて、それでダメなら、それは境遇で

はなく、自分そのものがダメなのだ。

「コーデュはそして、境遇もさるものながら、自分に圧倒的に欠けている物がある事を知るに至った。

彼女は、魔術の事しか頭に無かつたのだ。

社会を生きていく方法、効率的な消費の仕方。何もかも知らなかつた。

それでは、境遇が変わったとしても同じだ。やはり自分は、受け入れられないだろう。

コーデュはそれらを手に入れるべく、アルバイトに徹していた。そして、いつか魔術の才能を、存分に發揮する機会を求めて。

今更生まれなど、どうでもいい。貴族だらうがなんだらうが、関係無いと思っていた。

「……」

「コーデュはふと、隣が静かなのに気付いて、コルトを見た。彼はとても不愉快そうな顔をして黙っている。

「……コルト？ どうしたの？」

「……うん？ ああ、レディ……」

「コルトは慌てて笑顔を作ると、どもりながら答えた。

「その、……ああ、そうだ。ルグネスをどうするか、考えていたんだ」

「ああ、護衛さん」

「結局、何の役にも立ちませんでしたね、その護衛」

ウヘルが言うと、コルトも唸る。

「どうしたものか……。後で問い合わせてはみるが」

「今のうちにクビを切つておくのも手ですよ。護衛なんていうのは、居るだけで人件費を吸い取る負債ですからね。損切りするのも可能ですし、貴方がその護衛の今後に期待するなら、投資と呼べなくも無いですが……まあ、良く話し合つ事ですね」

「うむ……しかし……ううん」

コルトはしきりに悩んでいる様子だった。

コルトを一人きりにさせてやれば、そのルグネスというのも、顔を出してくるのだろう。今日は部屋を三つ取るか、とウェルが呟いていると、フエロネスが小さく吠えた。いつの間にか、村の明かりが近くにあった。

翌日。

トウエル村の一角に有るレストランは、昼時を迎えた賑わっていた。テーブルは殆どが埋まつてゐたが、わずかに空きが出来ては、そこに入々が滑り込む。行列が出来るほどではないが、そこそこ人気のある店だった。

その隅の隅で、コルトとコーデュが昼食を取つていた。
ミートソーススパゲッティとチヨコレートパフェ、という奇怪な組み合わせを食べるコルト。三種類のパンとサラダと鳥腿肉のソテーを黙々と食べるコーデュ。二人とも、昼食にしては妙な組み合せだ。

そこにウヘルの姿は無かつた。

ウヘルは朝方「ベイトリオン氏の調査の報酬は、したるものだつたよ。残りの資金を貯めに行つて来る」と昨日とは違つ店の広告を額に書いて、そして出て行つた。

コルトとコーデュは、旅に必要な買い物をして、後は自由にしていいと言わた。ただし、使いすぎたら働いてもらつよ、と念も押される。

一人は店を廻り、保存食や衣類等を買つと、昼食を取る事にした。そして、今に至る。

「……そういえば。前から気になつてたんだけど」「うん？ 何だい、レディ」「レディって言うの、止めてくれない？ ……それで、コルトって、ウヘルと知り合いだつたの？」「……どうしてだい？ コーデュ」ミートボールをフォークで刺したまま、意外そうな顔をするコルトに、コーデュは言った。「だって、王族つてかなり居るんでしょう？ 例の目印ネックレス

が有つたからって……正確な、何人目の王子かつて、判らないと思うけど。実際、ウェルは未だにコルトの番号を覚えてないでしょ。

だけどコルトはウェルが一三番だって、一旦で判つたじやない

「ああ……ああ、ああ」

「コルトはその事か、としきりに頷いて、そして一度黙る。ミートボールを食べて、水を飲み、それから答えた。

「私は一三番……ウェルと面識は有つた。しかし、知り合いといふほどでは無かつたね」

「じゃあ、どうして？」

「年に何度も、誕生会やパーティーが催される。その席には王族の多くが集まるが、あんな奴は他に居なかつた」

「……………」

「王族に、守銭奴なんて種族が居るものか」

「コルトは不愉快そうに言つて、チヨコレートパフェに手を付けた。どうやら、パフェをおかずースpagettiを食べるつもりのようだ。

「守銭奴……」

「奴は、やれ投資だの、資産価値だの、税率がどうだの、ブツブツと語つて来てな。こんなに金にがめつい奴は見た事が無い、こいつは本物の金の亡者だな、と思った。だから覚えていた。他の王族も、守銭奴と言えば奴の顔が浮かぶはずだ」

どんな凄い演説をしたのかは知らないが、ウェルは王族の中でもかなり特異な存在のようだ。コルトは笑つて言つた。

「それで、それが元で、ウェルは父上に呼び出されてな。特別課題を与えられたのさ」

「特別課題つて？」

「王族は『王たる証』として、何かを提出しなければならないが、ウェルはもう一つ課題を与えられたんだ」

「それつて、何？」

「金で買えない物。金に替えられない物。プレイスレスを学んでまい、その結果を提示しろ、と」

「……プライスレス」

「守銭奴には学ぶべき言葉だらう。だから私も、愛が一番だつて言ってやるが、どうにも奴は言う事を聞かん」

困った奴だ、とコルトは呟く。アンタも相当困った奴だけどね、とコーデュは心中で呟いて、ソテーを口に運ぶ。

確かに、ウェルは変だ。コルトがこれだけ豪遊しているのだから、かなりのお金は有るだろうに、自分で稼がないと気が済まないらしい。それは奇妙な話ではあるが、どこか清々しい。

そう考えると、コルトの方がよほど変な人間にも思える。

「……えーと、コルト。なんで貴方は、その、提出を……愛つてのにしたの？」

「君にした理由かい？」

「いや、私がどうかはともかく、愛をテーマにした理由」

さりげなくお断りを入れて尋ねると、コルトは笑んで言った。

「こんな時代だがね、政権争いは凄惨だ。王宮では、三〇人以上の王族が競い合い、そしてその親類達は、我が子に幸され、といがみ合いと陰謀を巡らせる」

王宮は修羅場だよ、地獄絵図だ。王妃は皆、鬼ばかりさ。

コルトはそう言いながら、スペゲッティとチョコパフェを交互に食べている。色んな意味で異様だ。

「まあそんなドロドロの世界で育つた私はね、眞実の愛つて物を見つけようと思ったのさ。嫉妬もそねみも、なあんにも無い、ただ純粹な愛つてのをね」

「……それで、ストーカー？」

思わず尋ねると、コルトはきょとんとした顔をして。

「ストーカー？ それは何の事だい、コーデュ」と尋ね返した。

「……」

コーデュはしばらく「ストーカー」が何であるか、説明すべきか否か悩んだが、止めた。事がもつとややこしくなりそうだつた。

「……あー……そういえば、ルグネスさんは、どうするの？」

「ああ……一応、少し減俸で手を打つたよ」

「クビにするんじゃなかつたの？」

「いや……ルグネスにも言い分があつて……」

「言い分つて？」

「コーデュが尋ねると、コルトは溜息を吐いて言った。

「王都クレシュ近辺では手に入らない、珍しいきのこの採取に夢中だつたんだと」

「…………きのこ」

「護衛の仕事を止めたら、料理人になるのが夢だそうでね。……食材には目が無くて、ふと気付いたら私が叫んでいたのだが、駆けつける間に全て終わっていたんだそうだ」

「…………その、いいかしら」

「何だい、コーデュ」

「普通、雇い主よりきのこを優先するような護衛、即クビになると思うんだけど……」

「どういう慈愛なの？ それも愛の世界の一種？」

「コーデュが尋ねると、コルトは「うーん」と唸つて、答えた。

「なんというか、説明すると難しいんだが……私は、その……人間を見ているとね、匂いというか……何かが、判るんだ」

「判る？ ……何が？」

「そうだなあ……今までの経験から言えば、「良い」か「悪い」か……って感じだろうか」

人の目を見ると、大体判つてしまつんだ。

コルトはそう呟いた。

それは、陰謀渦巻く王宮の暮らしが作つた、生き残るための技術なのかもしれない。

いざれにせ、コルトはそういつた「相手が自分にとつてどういっ存在か」を一目で見分ける力を持つていた。

それは「彼は だから××に役に立つ、故に私の味方」というほど明確なものではない。が、なんとなく、伝わってくる。

どちらかといふと、「良い」、「悪い」、といった単純な仕分けが行われている、とコルトは言つた。

「こいつは「良い」、こいつは「悪い」、と、本能と言つか、生理的と言つか……とにかく、分けているようなんだ。外見とか、血筋とかに関係無くね」

「じゃあ……」

「うむ。」コーデュ。君は大変良い。今までに無い好感触だ。だから君を欲しいと思つた」

「……その、ルグネスさんも？」

あえて聞かなかつた事にして尋ねると、コルトも特に気にした様子も無く頷いた。

「ルグネスも、……ああいうへやはやらかしても、どうせ「悪い」とは思えない。むしろ、「良い」に分類されていて……出来る事なら、これからも一緒に居たいんだが……」

だが、主が絶体絶命の時にきのこ狩りをしている護衛である。いかに勘が鋭いとはいえ、さすがに自分の目を疑わずには居られないようだつた。

「……まあ、汚名返上を待つしか、無いわね」

「そうだな……」

「……あら？ ジゃあ、ウエルは貴方にとつて、「良い」の？ 「悪い」の？」

「……それが、難しい」

コルトは溜息を吐いて言つた。

「あんな守銭奴は、嫌悪するべき人種だ。金の事しか頭に無い。世の中にはもつといい事が溢れているつていうのに。王宮の中でもあんな争いはあつてね、私はどうも金という奴を好かないが。それにしても哀れな奴だ。……しかし、私はウエルを、「悪い」と感じていないんだ。どうにもおかしい。変だ。勘が鈍つたのかもしない」

「コルトはパイナップルを皿の隅に避けながら、言った。

「もしウェルが「良い」だとしたら、どうしてそうなのかが知りたい。「悪い」なら、私の勘もあてにならない、でいいんだが……どうも、判らない。ウェルとは考え方も何もかも、違うからな」「まあ、理解し合えないからって、敵同士って事もないでしょうしね」

「つむ……おかしな展開になってしまったが、結局、ウェルについて行くと、私も勘の是非が判る気がするから……。今しばらく、冒険旅行とやらを続けてみようと思う。私自身は働いたら負けだとさえ思っているのだが」

「……それはそれで、やっぱいけどね……」

少し呆れてコーデュは呟く。ウェルはウェルで問題があるが、コルトはコルトで色々とおかしい。

そんな事をコーデュが考えていると、コルトはふいに顔をしかめた。
「そういうえば……彼、ベイトリオン氏は……明らかに「悪い」だつたんだが……」

「え？」

「コーデュが思わず聞き返した時。

「きやああああ！」

耳に付く、甲高い悲鳴が、店の外から幾つも上がった。

静かで長閑なトウエル村は今、悲鳴と混乱で、といった返していた。

「なんだ！？」

店の窓に駆け寄り、コルトとコーデュは外を見る。

店の外では、無数の鳥類が村人を襲っていた。人の子供ほどはもううかという巨鳥が、人々を追い回している。

否、ただの鳥ではない。

「召喚獣、ルヴィエン……」

「コーデュが呟いた。

鳥を主体とし、鉱石とヘビなどを組み合わせた召喚獣、ルヴィエン。石の体を持ち、赤い一つ目で視力は無い。代わりに特殊な視野を使って、闇夜でも標的を見つけ出す。偵察や暗殺、拉致に応用される召喚獣だ。

「召喚獣？ ジャあ、ベイトリオンか？！」

「でしょうね」

コーデュはすぐに店を出ようとすると、コルトも慌てて追うが、「貴方は邪魔だから隠れてなさい」と言われて、大人しく引っ込んだ。コーデュは静かに店外に出る。すぐ側にあった花壇の裏にしゃがみこみ、魔術式を組み立てる。

石の体を持つ鳥だ。銃や剣は効き難い。音波系魔法で内部から破壊するのが、最も効果的だ。

「助けてえ！」

近くに走つて来た女性が叫ぶ。その後ろから、ルヴィエンが急降下してくる。鋭い鉤爪を伸ばし、女性を掴もうとした瞬間を狙つて、コーデュは小さく手を払つた。

ぴいん、という甲高い音。人間にはそれしか聞こえないが、それはルヴィエンの体を内部から崩壊させるだけの力があった。

空中で碎けた石が、ばさばさと砂状になつて地面に落ちる。女性は振り返つて、何事かとコーデュを見る。

「屋内へ、隠れて下さい」

コーデュが静かに言つ。こういう時に、落ち着いたコーデュの無表情は有効だった。パニックを起こしかけていた女性も、コーデュの言葉に「は、はい」と冷静さをやや取り戻し、近くの店に避難する。

空には依然、ルヴィエンが飛び交つていた。コーデュはそれらを一つ一つ破壊しながら、村を駆けて行く。

と、

「リュエル、リュエルーっ！」

女の叫び声が耳に届いた。コーデュはすぐにそちらに向かう。そ

れらしい女を見つけると、その視線の先を見て、コーデュは思わず舌打ちした。

ルヴィエンが、幼い少女を抱えて飛び去るとしている。

「ママー！」

少女は泣きながらもがいでいるが、ルヴィエンはそれを巧みに押さえ込んで、山へと身を翻す。

コーデュはルヴィエンに狙いを定めたが、魔法を放つ事は出来なかつた。既にルヴィエンはかなりの高度に居る。大人ならともかく、子供を放り出すには危険過ぎる高さだった。

成す術も無く、見上げるしかないコーデュをよそに、ルヴィエン達は村から去つて行つた。母親の泣き声だけが、村に響く。

「……助けに行こう」

声にコーデュが振り返ると、いつの間にか額に「ルバイズ食品店」と書いたウヘルが立つていた。騒ぎに気付いて駆けつけたようだ。

「ベイトリオンは無害だと報告した。僕には、責任がある」

ウヘルは裏山を見上げて言つた。いつになく真剣な表情に、コーデュは「私も行く」と告げる。ウヘルが小さく「ありがとう」と咳いた。遠くからコルトが駆け寄つて来るのが見えた。

昨日登つた山を、今日も登る。

一度田ともなると少し慣れたのか、前回より早く目的地に辿り着いた。

「妙ね、フエロネスが一匹も居ない」

「コーデュが呟くと、ウヘルが言つた。

「罠のかもね」

「随分気楽に言つわね」

「いずれにせ、行かなくてはならない」

ベイトリオンの小屋に近付きながら、コルトは言つ。

「私も不覚だつた。あれだけ「悪い」と感じていたのに」

彼なりの勘が、何かを告げていたようだ。けれど、コルトにはそ

の「悪い」の程度までは判らない。何が「悪い」のかまでは、彼に知る事は出来なかつた。

「コルトのせいぢやないわ。私もウェルも、彼を疑わなかつたんだもの」

「しかし……」

「それより、早く女の子を助けてあげないと。もしかしたら、召喚に使う氣なかもしれない」

「コーデュの言葉に、コルトもようやく頷いた。

三人はそつと母屋に近寄り、窓から中を覗きこむ。ベイトリオンは居ない。

「……という事は、納屋かな」

二つの納屋のうち、東の納屋に三人は脚を向けた。こちらは窓がないので、正面から入るしかない。

ウェルが静かに扉に手をかけて、開く。

納屋の中は薄暗い。本棚がいくつもあり、膨大な量の書物が置いてある。テーブルの上に、一本ろうそくが立っていて、ゆらゆらと辺りを照らしている。

部屋の中を覗き、ベイトリオンや召喚獣が居ない事を確認すると、ウェルは中に入った。続いて、コーデュとコルトも入る。

ウェルは本棚を見上げた。どれも魔術関連の本だった。召喚術の基礎から応用、果ては禁術まで。魔術師シュレグとその一族を記した物。発禁本まである。よくここまで集めたものだ、とウェルは感心してそれらを見る。

ウェルはふと気付いて「シュレグの血」という本の背表紙をじっと見つめる。古びた本には、赤い宝石の絵が描いてあつた。鳥のような金の模様が浮き出た、赤い宝石。

「……まさか」

ウェルが呟いた時、

「！ コーデュ！」

コルトが声を上げた。ウェルが振り返ると、コーデュが静かに

床に倒れるのと、ほぼ同時だった。

「コード、どうした！？」

コルトが声をかけるが、コードは返事もしない。良く見ると、左腕に針のようなものが刺さっていた。コルトはすぐにそれを引き抜き、放り捨てるが、コードはべつたりとしていて意識も無い。

「コード！」

ウェルもコードに駆け寄る。すると、物陰からベイトリオンが歩み出きた。

「いらっしゃい、皆さん」

ベイトリオンは見るからに凶悪そうな、熊に似た四脚獣を一匹連れていった。水の体を持つ熊には、眼が六つある。

「ベイトリオンさん……コードに、何をしたんですか？」

ウェルが睨みつけて尋ねると、ベイトリオンは肩をすくめて言った。

「まあ、安心して下せ。殺す気はありませんよ」

「なんだと……！」

「あまり下手に動かないほうがいい。ロドッショ達には、私の身を守るように指示してあります。不完全なので……。勝手に攻撃してしまうかもしれません」

ベイトリオンは召喚獣……ロドッショを撫でながら言った。

「……それで、交渉とこきませんか」

「交渉？」

ウェルが尋ねると、ベイトリオンは「ええ」と頷いて、手を振つた。すると納屋の奥から、一羽のルヴィエンが、少女を抱えて飛んでくる。少女もまた、コードと同じように眠っていた。

「まずはあの少女。お返ししましょう。ルヴィエンが間違えて攫つて来てしまったようです。いや、村の皆さんは悪い事をした。申し訳ない」

ベイトリオンはわざとらしく口調で言しながら、何か袋を取り出す。

「ルヴィエン達の情報は、正しく塗り替えますので心配なさりぬよう、村の方々にお伝え願いませんか。これは心づけです」

ベイトリオンはウェルの側まで来ると、袋を差し出す。ウェルが受け取つて中を見ると、金貨が入つていた。

「旅のお供に。必要なのでしきう？」

ベイトリオンはにつこりと笑つて、そしてもう一つ袋を取り出した。

「それと、折り入つて相談が。この方を数田、預からせていただけませんか。とつて食べたり、殺したりはしませんよ。用が済めばお返しします。それなりの金額も払わせていただきます。まあ……お断りになられてもその時は、貴方達がお亡くなりになるだけですが、ロドッシュ達が小さく唸る。ロドッシュは戦闘用の召喚獣だ。直接的な攻撃は一切効かない水の体。一方で水には攻撃力がある。ベイトリオンの言葉はハッタリではない。ロドッシュをけしかけられたら、二人の命は無いだろう。

「そんな話、受けると思つているのか！？」

しかし、状況を知つてか知らずか、コルトが怒鳴る。それを尻目に、ウェルは

「この倍額なら受けましょう」

と答える。コルトは驚いてウェルを睨みつけた。

「ウェル！ どういうつもりだ!? こいつは、コーデュに何かする気だぞ!? 彼女は私達の仲間だらうが！」

「現在の所、投資に見合つた成果は出せていませんから

ウェルは静かに言った。

「ひつひつのを、損切りと言ひつののです」

その後、倍額を支払つたベイトリオンに、ウェルは別れを告げた。コルトはコーデュを取り戻そうとしたが、察したウェルは彼を殴る。元々脆弱なコルトは、あっさりと氣を失う。

ウェルはコルトを抱えて村に戻り、少女を母親の元へ返し、そし

て村人にベイトリオンの無実を説明した。

村人達は不満そうだったが、事実、怪我人などは出ていなかつたので、渋々納得した様子だつた。

ウェルは宿に戻ると、コルトを寝台に乗せ、そして手元の袋を開く。

袋いっぱいの金貨が、静かに煌いていた。

7 世界はそれを愛と呼ぶ

その時、コルトはまだ一一歳だった。

「お見事！」

広い大理石の鍛錬場に、拍手が起る。

古いビジョンだ。白黒の幕がかかつた、記憶の中の世界。ボンヤリとした五感。

夢を見ているのだ。

コルトは思った。これは、自分が一一歳だった頃の、夢。アルキーシュ王国の王都クレシュ。その中央に広がる豪奢で雄大な王宮ロンドリア。

全ての王族はそこで生まれ、育つ。コルトも例外ではない。

コルトはその頃、剣術を学んでいた。もつとも、非力なコルトの事。実用ではなく、見世物としての剣術である。むしろコルトは剣術に長けていた。元々器用だったコルトは、それらを瞬く間に習得する。

そしてその日も、広い鍛錬場でレイピアを構え、剣舞を演じていた。何か見えない物を断ち切るように剣を振り抜けば、顔もおぼろげな剣術指導の教師が、大げさに手を叩く。

「さすが、コルティ工様は何をやっても上達がお早い。母君も、さぞかし誇らしくお思いでしょう」

作り笑いで世辞を並べて、何を欲しがっているのか。

賞賛を受けているコルトは、冷めた目でその教師を見た。

「ならば、是非とも母上から、直々にお褒めに預かりたいものだ」コルトが吐き捨てるように言つたが、教師は笑みを顔に張り付かせたまま、反応しない。コルトは忌々しげに顔を歪めると、鍛錬場を後にした。

国王の八番目の側室ウエリードの次男であるコルトは、他の王子

と同じように、英才教育を受けている。

しかしコルトは、母を良く知らない。

うんと幼かつた頃、母と思われる人物と、手を繋いでいた記憶があるだけだ。

母であるウエリードは、コルトが六歳の時に誕生した妹に、愛情を注いでいた。妹が誕生して以来、コルトは母に会つ事も、ましてや見る事さえも出来ていない。

コルトは必死だった。母に会いたいという思いは強く、母が望んでいると知れば、どんな難しい学術書でも読み、特に興味は無かつたが、ダンスや剣術にも精を出した。

けれど、どれほど努力しても、幾つ成果を並べても、母はコルトに会いに来ではくれなかつた。

「コルト様、お召し替えをなさいませんと、風邪を引きますよ」自室に戻つて、そのままベッドに倒れこむ。と、すぐに現れて、着替えを差し出して来る人物。黒髪の少年。ルグネスだ。

「お前は律儀だな。だが他の連中と違つて、作り笑いをするような奴でもない」

「お気に召しませんか」

「いいや」

コルトは苦笑して身を起こす。ルグネスから着替えを受け取ると、ルグネスがすぐに出て行こうとしたので、コルトは思わず呼び止める。

「ルグネス」

「は……」

「随分素つ気無いな」

「お着替えを見るのは、失礼にあたるかと……」

「ああ、まあ……それはそうだが……ルグネス、一つ聞いていいかな」

「何でしちゃうか?」

「お前は、両親に会いたいと思うか？」

コルトがブラウスを広げながら問うと、彼は小さく首を傾げて答えた。

「生憎、思った事がございません」

「本當か？ 本当に、一度もか？」

「はい」

「では、私は弱い人間なのかな。……」なんにも、母に会いたいと思うのは

コルトが苦笑すると、ルグネスは首を振つて言つた。

「私は、元々両親を存じません。身の回りに両親というモノがありませんので、羨ましいとも思いません。それだけです。恐らく、知つてゐるならば、恋しいのは当然でしょう」

「そうかな」

「恐らく、ですが……。私は、コルト様に拾つていただいた身。私にとつては、コルト様が両親のようなものです」

「よしてくれ、そんなに歳は変わらないじゃないか」

コルトは苦笑して、そして俯いて言つた。

「私は両親から離されて、お前は捨てられて。この世は、愛に欠けているな」

「……コルト様があつしやられるならば、そつなのでしょうね」

「……ルグネス。私は、王になるぞ」

突然の宣言に、ルグネスは首を傾げる。コルトは顔を上げ、ルグネスを見つめた。

「愛の国を作るんだ。親の愛を知らない子が居ない世界。互いが互いに愛し合う世界。いいだろ？」

「はあ……」

「良くないか？」

「判りません。私は、愛と言つ物を存じませんので」

「つまらない奴だな、ルグネスは」

コルトは溜息を吐いて、それから言つた。

「いざれにせ、ルグネス。お前さえ嫌じやなければ、ずっと私を支えていてくれ。私が心を許せるのは、なんだかんだ言って、お前だけだから」

私が王になる道を、助けてくれ。

コルトが言うと、ルグネスは大きく頷いて。
「私の命が果てるまで、お供する覚悟です」

と言い切った。

「……お前、古い奴だな」

「良く言われます」

「……まあ、嫌いじゃない。ありがとう。……着替えるから、出て行つてくれるか」

「御意」

ルグネスは礼をして、踵を返す。その背中に向かつて、コルトは言つた。

「おーい。その、命をかけるぞつてのが、愛つて奴かもしれないぞ、

ルグネス

「……」

ルグネスは一度振り返つてコルトを見ると、皿を僅かに細めて、出て行つた。

「……愛の世界。いいな。思いつきだけじ、なんだかいな。……
まずは、いい嫁を搜さなきやいけないが……」

コルトは先ほどまでの憂鬱を忘れて、楽しそうに咳きながら、着替えを始めた。

夢はそこで場面が変わる。

何年も前の出来事が、昨夜と繋がる。

「一生の不覚です、コルト様。何なりと処分を」

夜になると、天井から出て来たルグネスが、静かに頭を垂れた。

「……一応、言い訳を聞こづ」

コルトが言うと、ルグネスはしばらく悩んで、答えた。

「きのこを……」

「何?」

「きのこを、採つてありました」

「……」

あまりといえばあまりの理由に、コルトは啞然としてルグネスを見る。

「……私より、きのこが大事か」

「いえ、そうではなく……その、この辺りは、王都とは気候が違つて、……図鑑でしか見られないような、珍しいきのこが、群生しております。私は、不肖ながら、料理人に憧れています……それで、思わず、こう、夢中で……」

「……きのこ狩りをしていた、と」

「は、はい……」

「……」

コルトは何も言えなかつた。何年も生活を共にしてきたルグネスが、自分よりきのこを優先したのである。それはコルトにとって、かなり悲しい事態だ。

しかし、ルグネスの方も反省しているようだ。成長しても中性的な顔立ちに、影が差している。いつも静かではあるが、今の彼はとても沈んでいるのが良く判る。

「料理人か……」

「はい……引退したら、料理を作りたいと思っておりまして……」

「引退、な……」

コルトは溜息を吐いて、ルグネスを見た。

ルグネスは幼い頃、孤児だつた。それを偶然拾い上げたのがコルトだ。コルトは同じ年頃のルグネスと共に成長した。王族給付金を分け与えて、コルトの不得意な戦闘の技をルグネスに学ばせ、護衛として取り立てた。

長い年月を共に過ごし、本当の兄弟よりも近い人間だとさえ思つ

ている。

だからこそ、今回の事は驚いた。が、その兄弟の夢をどうしてコルトが否定出来るだろうか。彼は彼なりに夢を抱いて生きてきたはずだ。彼はルグネスであつて、コルトの護衛として生まれてきたわけではないのだから。

「……次回に期待するよ。今月の給料は減俸する」

「……ですが、」

「いい。気にしてない。私とお前の仲だ。今回の事は、忘れる」でも、次はちゃんと助けてくれないと、困るからな。

コルトが言うと、ルグネスは力いっぱい頭を下げて言った。

「このルグネス、コルト様の御為に、命を捨てる覚悟です！」そしてコルトは苦笑して、言つ。

「死ぬ事は無い。私が作る愛の世界……そこへ、お前も居て欲しいんだから。……そうだ、私が王になつたら、お前を料理人として召してやつてもいいぞ。だから、その時まで生きていろ」

でないと、何をやつているか判らない。

コルトがそう言つてやると、ルグネスは顔を上げて、そして僅かに目を細めた。

だのに、愛の世界を作らなくてはいけないのに。

今日、私はコーデュを救えなかつた。

口ではあれだけ愛を語つて、命を捨てると言つ張つたのに、守れなかつた。

……否、まだ遅くないはずだ。

コーデュを助けて、式を挙げて、愛の世界を作らなくてはー

コルトは強く思い、そして目を開けた。

コルトが眼を覚ましたのは、その日の夕方だつた。

「コーデュ！」

叫んで飛び起ると、そこは宿屋の一室。コルトはベッドに横たわっていた。慌てて辺りを見渡すと、ウェルが荷物を整理しているのを見つける。

「ウェル、貴様！」

コルトは思わずウェルに飛び掛っていた。ウェルもなすがままに床に叩きつけられる。コルトはウェルの胸倉を掴み上げると、怒鳴つた。

「お前は、何処までも腐った奴だ！ そんなに金が大事か！ コーデュとのこの数日は、たったそれだけの金で売り飛ばせるものか！？ お前に人の心つて物は、無いのか！？」

コルトの視線の先には、机。その上には、金貨が積まれている。

「たったそれだけの金。そう見えますか」

「何い？」

「貴方は金のなんたるかが、何も見えてない。そればかりか、貴方の生き方は見るも無残なほどに非効率だ。哀れみさえ覚えますよ」「哀れだと！？」

「愛だなんだと言いながら。その貧弱な腕で何を守れますか。愛で何が出来るんです。愛だけでは、コーデュを救う事も、まして自分の身を守る事も出来ない。貴方は口先ばかりの現実逃避者に過ぎない。しかも、自分を美化したい」

「黙れ！」

コルトはウェルを殴りつける。元々非力なコルトの力では、ウェルに怪我を負わせる事は出来ない。しかし、ウェルの頬は赤くなつたので、痛みはあつただろう。

「哀れなのはお前だ！ 人を売る、それは人間として最低の行為だぞ！ お前は人間じゃない！ お前と同じ血が流れていると思うと、虫唾が走る！」

「それはありがた事で」

「ウェル！ ……つ、もういい！ 私はコーデュを助けに行く！」

お前は金貨でも数えている!」

コルトはそう言い捨てる。ウェルから離れた。ウェルは静かに立ち上がり、出て行こうとするコルトを呼び止める。

「兄さん」

「なんだ!……つ、え? 今、お前、兄さんって言つたか?」

ウェルの口から出るはずの無い言葉に、コルトは怒りを忘れて振り返る。ウェルは真剣な顔で、コルトを見ていた。

「兄さんは、慎重さや、憂慮が足りてない。少し話しあう必要がある」

「そんな時間は無い。早くしなければ、コードュが……」

「ベイトリオンは召喚師。『コードュ』を使って何かをやるとすれば、召喚術。人間を使った召喚には、一日ないし一日かかる。僕達はその術が完成するまでに、コードュを助ければ問題無い。まして、相手はロドンシウなどの召喚獣を引き連れた強敵。兄さんがいぐらレピapiaを振り回しても、勝てっこない」

「……しかし」

「勝つ方法はあります。一人でなら。ここまではお判りでしょうが、その二人は、兄さんとルグネス君ではない。兄さんと、僕だ」

「……」

思い当たる事が有つたらしい。コルトは息を呑んで、そして舌打ちした。

「……それで、話し合ことは?」

「時間は有る。だから、まずは兄さんとの溝を埋めなくては。『アレ』はお互い信頼がないと、使えないから……」

ウェルは椅子を差し出して並べ。コルトはしばらく悩んだが、やがて椅子に腰掛けた。

「とりあえず、僕がこうこう性格になつた理由について、話しておるべきでしょうね」

ウェルもまた椅子に腰掛け、静かに語り始める。

「まず、最初に。僕は小さい頃、貧民の少女と出会いました」

「……貧民？ 王族のお前が？」

「僕の母は『存知の通り、平民の出自です。だから母は僕に、平民の暮らしも教えようと思ったのでショウ。買い物の仕方等を学んだり、庶民の中に紛れ込んで数日を過ごした事もあります』

「ふむ……変わっているな」

「ええ。……その頃、僕は速算力を高めるために、海の果ての小国で使われているという、暗算の秘術を学んでいたのです。こう、珠を幾つか用意して、その位置を入れ替える方式なのです……ともかく。その時に、件の少女を見ました。塾の隣の家に住んでいた少女で、話した事もありませんが」

「それで？ その少女がどうした」

「彼女は病気でした」

ウヘルはそこでふと言葉を区切り、先ほどの金貨を見て言った。

「僕達王族にとつては、これは些細な金です。しかし、平民にとつてみれば、何年も苦労して貯めるもの。……僕達のように、熱が出ては医者に行ける立場の者から見れば、彼女の病気もまた、些細なものでした。けれど彼女は幼かったし、その家計は苦しく、蓄えも無かつた。見かねて僕が薬を買い、届けに行つた時、彼女は棺の中に居ました。薬を三日も飲めば完治する病気だつたんですがね」

「……医者にも行けぬのか、貧民と言つものは」

「貧民はおろか、庶民も難しいでしょうね。殆どの人間は金銭の不足から、何らかの不幸を抱えています」

「ふむ」

コルトは腕を組んで考える。

コルトは生まれも育ちも貴族で、ダンスや剣術を学び、社交界の上手な渡り方を手に入れた。けれど、平民の事を考える機会は殆ど「えられなかつた。

今でこそ王宮を出て遊んでいるが、数年前までは、王宮の暮らしが普通だと思っていた。初めて庶民の生活に触れた時、なんと不便

な所だらうと、コルトは思つた。どうしてこの不便さに甘んじているのか、全く理解出来ない、と。

それは、甘んじてゐるのではなく、どうにもならない現実などと氣付くには、しばらくの時間要した。平民の孤児だつたルグネスも、コルトに世界の広さを教えてくれた。

「コルト達はあくまで、ほんの一握りの特殊な人間に過ぎないのだ。『そこで僕は考えた。人の不幸には一つある、と。一つは、金で避けられるもの。そして残りが、避けられないもの。兄さんを含め、多くの人は僕を守銭奴と蔑視します。それも事実でしょう。しかし世界には、金が無い故に起きる不幸が有ることもまた、確かな事実』

「うむ」

「ならば、金が無いにも関わらず、求めようとしない人は、自ら不幸を享受しているという事です。そんな愚かな事はありません。家で例えるなら、風に吹かれなくてすむと云ふのに、景色が見えなくなると壁を作らないようなものです」

「判りにくい例だな……まあいい、それで？」

「僕は金が欲しい。それを恥じない。何か物が欲しいからではなく、金で消せる不幸が欲しいから。僕にとって金は、魔よけです。お守りと同じです。ただ僕は、教会に行つてそれを買う代わりに、サイフを膨らませてゐるだけなのです」

「……」

「コルトは悩むしかなかつた。

全く違う価値觀に触れる、というのは、そういう事だ。理解するにしろ、しないにしろ、不快になる。極めて不愉快な事だ。

しかし、コルトはウェルの価値觀を、笑つて跳ね除ける気にはなれなかつた。

これは、ウェルが自分に心を開こうとしている瞬間なのだ。何かを伝えようと、何かを判り合おうとしている。ウェルは確かに、その努力をしようとしている。

コルトはその努力を無にしてしまつほど、ウェルの事を嫌いでは

なかつた。何しろ、彼の勘はウェルを「良い」と評価しているのだから。

「……それで、お前。王族給付金をどうした。確か、持っていないんだろう？」

「ええ。あれは投資に回しました」

「投資？」

コルトが尋ねると、ウェルは頷いて、説明した。

世にある不幸の源泉は、金に違いない。

けれど、世にはもう一つの不幸も常にある。

それは無知という事だ。

無知とは、文字が読めない事にとどまらない。難しい数式を解けない事だけではない。

全てを知らぬ人間は、どこまでいっても無知。極言すれば、人間は生きている限り無知なのだ。

病気を知らぬから、手遅れになる。生物学を知らぬから、害獣を駆除して、益獣が滅ぶ。

正しい知識と生活が結びついてこそ、人は上手に生きてゆける。学校はなにも、偏差値のために有るのではない。一生に渡つて続ける勉強の、準備をしているのだ。

一度やつてみて懲りたのですが、貧民にいくら金を与えても、すぐには無くなるだけなのです。彼らはまた飢えた貧民に戻る。だから僕は、彼らに金を与えるのではなく、金の知識を差し出す事にしました

「金の知識？」

「兄さんなら判ると思いますが、金は放つておけば無限に減ついく物です。その減少を、人は止めようとしません。穴の開いたバケツに、次から次へと水を注ぐ。つまり、収入を増やそうと努力します。彼らは、馬鹿馬のように働き続け、金を減らし続けます。そういうしている限り、貧民は貧民でしかありません。不幸はいつまで

も続くでしょ」

「とすると……お前はどうするんだ？」

「バケツの穴は塞げませんが、小さくする事は可能です。この世の全ての知識に、穴を埋める力があります。僕は、その事を貧民に教えようと思い……学校を、建てました。いくつか」

「……いくつかって、お前、まさか……」

「ほぼ全額、その資金で使い切りました」

ウエルがきつぱりと言つ。コルトはあまりの事に、眼を丸くするしかない。

「まあ、僕も馬鹿ではありませんから、残りの資金は運用していくますが。元本に手を付けないのは投資の基本ですからね」

「……」

「そういうわけで、僕は金が欲しいんです。とにかく欲しい。だから、コーデュの事を損切りと言つたのも、あながち嘘ではありません。彼女は今まで、金を使う事しかしていませんでしたから」

「……」

「コルトはしばらく悩んで、そして「うむ」と一度頷くと、言つた。「ウエル。お前の言つ事にも一理ある。だからこそ、私は否定ではなく、反論をするぞ。いいか、不幸は三つある。お前の言つ一つの不幸、それと、金がある不幸だ」

「……」

「私は金のおかげで裕福に育つたが、その反面、確かにお前より無知だ。確かに私は、穴の開いたバケツを抱えて、知らぬフリをしていた。となれば、金よりも不幸を呼ぶのは無知の方だろう。無知は金が無いから起こるわけではない。無知は、ただひたすらに不幸だ。それは認める」

「そうですか」

「だがな、ウエル。その上で私は、お前の無知を非難するぞ。コーデュは私にとつても、お前にとつても大事な人だ。何故なら、仲間だからだ。それを売るのは、お前の利益じゃない。損だ。それに気

付けないお前は無知だ

「……」

「例え、危険が有ったとしても、仲間を見捨てるような事をしてはいけない。お前の理屈は判るぞ、あの状況は確かに危険だった。けれど、もつ「コーデュはお前を仲間だと思わないかもしない。そうなれば、お前は折角見つけた仲間を失う事になる。それは明らかに損失だろ?」

「……」

ウェルは黙つてコルトの言葉を聴いていた。ウェルもまた、コルトの努力を受け入れようとしているのだろう。

「お前は事有る」と、投資だのなんだのと言つ。なら、「コーデュもまた投資だ。なのに、一緒に居て何日も経たないのに、こんな事をして。それは本当に愚かな損切りだ。もっと長い眼で見るのが、お前の言う投資だろ?」「コーデュを助けに行くぞ。そして、彼女にしつかりと謝れ。その後、たくさんの事があってから、コーデュをどうしようつとお前の勝手だ。その時は私が娶るから」
さりげなく主張しながらコルトは言つ。

「彼女を助けよう。そしてお前はプライスレスを探せ。必ず見つかるはずだ、彼女と居れば」

「……そうですね、僕もそう思います。何せ、彼女は只者じゃない」「……うん? 何の話だ?」

突然の話題の変化にコルトが尋ねると、ウェルは答えた。

「コーデュは、正真正銘、シユレグ一族の末裔なんです」

「……な?」

コルトはきょとんとした顔をする。何故そつなるのかが判らない様子だ。

「彼女のピアス。どこかで見たと思うはずですよ。赤水晶の中に浮かぶ金の鳥。フェーレルビー。シユレグ一門の魂を受け継ぐ、血を吸うピアス」

「あ! そついえば……古い伝承だから、すっかり忘れていた」

「シュレグ一門は絶滅したはずですからね……恐らく、分家の末裔なのでしょう」

魔術師シュレグの一族は、その殆どが消された。

現在の国王達の祖先、四人の戦士達は各自、特殊な能力を使い、彼らに打ち勝つた。彼らを大いなる青き洞穴、ゴルドウーンに追いやり、封印したという。

その後、シュレグの血を継ぐ者達は、執拗な攻撃を受けた。しかし幼い子や、身重の女、関係者だが、悪意の無い者達は生き延びる事を許された。

代わりに血の呪いを彼らは受けた。一目でそれと判るよう、彼らには生まれた時からフェーレルビーが付くする。決して外れないよう、本能に枷をした目印だった。

しかしその目印は、彼らを弾圧するに充分だった。フェーレルビーの持ち主は、シュレグの血を引く者と迫害され、時には事故とう名目で消された。

そうして、今やフェーレルビーの示す物が何であったかさえ、人々の記憶から消えていた。

「彼女は本当の意味で投資です。僕も彼女を失いたくない。彼女は自覚の無い逸材だ」

ウェルは笑んで言った。

「一緒に、助けに行きましょう。兄さん」

その言葉に、コルトは大きく頷く。初めて二人の利害関係が一致した。

「でも良かつたですね、兄さん。やっぱりお金は大事ですよ」「何? どうしてそんな話になる。プライスレスを探すために、コーデュを助けに行くのだろう」

「だって、考えてもみて下さいよ。兄さんとルグネス君では、ベイトリオンには対抗しきれないでしょう。兄さんは重火器にも詳しくないし。でも、僕が本当に金に困っていたら、この金が手放せませんから、コーデュを見捨ててしまつたでしょう。僕は金に困っていました」

ないから、兄さんに協力する。兄さんは「一テュを助けられるかもしれない。ほら、僕に金が無かつたら、いつはいかないでしょう？」

「……」

「僕は何も、金が一番でそれしか無いと思つてゐるわけではないんです。ただ、必要であり、上手に付き合わなくてはならない金という物に皆、あまりに無頓着だ。僕は少しでもいいから、金という物が何であるかを考えて欲しいだけなんですよ」

「……ふん。……これが無事済んだら、考へてもいいぞ」

「是非、お願ひします。……まずは、武器を買い揃えなくては」

ウエルは机の金貨を手に取ると、コルトを手招いて宿を出た。

8 ベイトリオン

時は今より、一〇年の月日を遡る。

その頃、ベイトリオン・クレッセルはキャドゥー王国に住んでいた。当時キャドゥーは鉱山地帯で、未発達の街も多くあり、それゆえ物価は安く、暮らし易かつた。

ただしそれは、一般人に限る話だ。その時から、キャドゥーでは他の地方よりも魔術は敬遠され、魔術師は職を持てなかつた。

メルティーナ国立魔術研究所に入れなかつたベイトリオンは、召喚師としての道を諦め、ひつそりと暮らしていた。そんな頃、ベイトリオンは暗黒魔術の先進研究者に出会い、その考えに傾倒し、再度魔術の道を歩く事を決意する。

ベイトリオンは暗黒魔術の研究を独自で進めていった。その時出会つたミーティアという魔術師の女性と意気投合し、結婚する。間もなく息子に恵まれ、エルバと名付けた。

ベイトリオンはひつそりと自宅にこもり、研究を続けた。世間に忌まわれる魔術を、現代に於いても受け入れられるよう、改良を続けていた。しかしそれは困難で、作業は思うようにはかどらない。いつしか妻のミーティアは魔術を捨て、勤労するしかなくなつた。

その姿を近隣の人々はどう見たのだろうか。ただでさえ魔術師は敬遠されていた。ベイトリオンは日夜研究に明け暮れ、外に出る機会もあまり無い。息子のエルバも魔術を直々に教えられていたため、近隣住民との関係は疎遠だつた。

そんなある日の事。妻のミーティアは息子のエルバを連れて、買い物に出かけた。ベイトリオンは一家に残り、研究を続けていた。夕方になり、帰りが遅い事を案じたベイトリオンは、作業を止め、家を出る。

そして彼は恐ろしい事実を知つた。

開発中の機械が鉱山内で事故を起こし、火災等で数十名が犠牲になつたという。町中が大騒ぎをしていたが、ベイトリオンは研究に没頭するあまり、それに気付かなかつた。

まさか。

彼は妻と息子の姿を捜した。事故は悲惨なものだつた。どうやら爆発を起こしたらしい。鉱山の中で爆ぜた炎は、そのまま坑道の中を焼き尽くし、居場所を無くして街に噴出したようだ。商店街の一角は焼け落ち、見る影も無い。肉の焼ける匂いにむせそつだつた。衝撃があつたのか、幾つかの棟は崩れています。その側に、死体が安置されていた。

ベイトリオンはそこに駆け寄り、妻と息子を捜す。

妻の姿があつた。

変わり果て、そこに横たわるだけの妻に、ベイトリオンは声も無い。全身から力が抜け、崩れ落ちそうになりながら、彼は気付く。

息子が居ない。

未だに建物の下敷きになつてゐるのか、はたまた生きているのか。息子の姿は死体置き場には無かつた。

ベイトリオンはひとまず妻のもとを離れ、息子を捜した。

まだ生きている人間が病院に運ばれて行くのを見て、ベイトリオンはそこに向かつた。

そこにはエルバも居た。まだかろうじて呼吸をしている。救護班に瓦礫の中から救助され、意識の無いまま治療待ちの棚の中に入れられたようだつた。

「エルバ！」

ベイトリオンは息子に駆け寄り、声をかける。が、エルバの顔色は青ざめ、返事は無い。呼吸はかすかで、今にも止まつてしまつた。

「誰か、息子を、エルバを助けてくれ！」

ベイトリオンは医者と思わしき人間に叫ぶが、受け入れられない。

「その子よりもっと重篤な人々が大勢居ます。そちらが先なんです」「このままでは息子は死んでしまう！……そうだ、お金ならいくらでも出します、どうか息子を、エルバを……！」

そう叫ぶベイトリオンを医師は鼻で笑つて言った。

「おたく、魔術師でしたな。ご自分で治療なされたらいかがですか」人々の目は、魔術師であるベイトリオンに、ひたすらに冷たかつた。

ベイトリオンはそれから長い間医師に訴えたが、結局聞き入れられなかつた。死に逝く息子の手を取り、ベイトリオンは覚悟を決めた。まだ息の有るエルバを運び、自宅へと戻る。

魔術も金も人情も、何もかも役に立たない。全て意味が無い。

ベイトリオンはそして禁断の魔術式を開いた。

それは何年も前に自ら捨て去つた、召喚術だった。

ガタリ。

物音にベイトリオンは目を覚ました。見ると、そこはトウエル村の裏山。現在のベイトリオンの家だつた。窓からはつづらと明かりが差している。朝のようだ。

古い夢を見たものだ。ベイトリオンは苦笑して、そして物音のした方に目を向ける。

暗がりに、大きな影が立つてゐる。

「……ああ、おはよう、エルバ」

ベイトリオンはにこりと笑んで言った。

「朝ごはんにしようか。この世界の終わりを前に、良い食事を楽しもう」

その時、コーデュは何も無い空間を漂っていた。

否、闇はあった。ただひたすらの闇。その中でコーデュは、波に漂う木つ端のようこ、ゆらゆらと浮いている。

（ここ、何処だらう……）

闇の世界は、少し懐かしさを感じさせた。胎内のようにもある。コーデュはやんわりと体を動かし、歩いてみた。そこには地面というのも無い。ふわふわと揺れるだけで、先に進んでいいのか否かも判らない。

コーデュはしばらく辺りを見渡したが、何も変わらなかつた。仕方なく、ここに来るまで何をしていたかを思い出そうとする。少女が攫われた。助けに行つた。納屋に入った。左腕が、チクリとした。

コーデュの記憶はそこで途切れている。気付けば、ここに居た。ここが何処なのか考へるが、こんな場所は文献に載つていなかつた。……いや、思い起こしてみると、似たような場所の記述は、有つた。

混沌

全ての物が等しく集い、また自ら形を成さない場所。魔術が絶対に干渉出来ない場所。あるいは、シュレグが最後に干渉しようとした、究極の空間。

全てが集い、無限に存在する。この空間を魔術式と結合出来れば、それは世界を変えるほどの力になる。いわばそれは、賢者の石。無の空間から、物質と現象を構成する、最強の魔術を作り出せる。

シュレグは世界を牛耳る前に、それを求めた。ひたすらに混沌を探し、結合しようとした。結果、その隙が彼らを世界の玉座から引きずり落とす事になった。

混沌の研究に没頭している間に、四人の戦士が彼らの一族を追い詰め、封印するに至つたのだ。

シュレグは求めすぎた。混沌とは、この世に存在しないものなのだ。理論上にしかないものだった。

けれど。

(じゃあ、そこに漂つてゐる私つて、何)
「コーデュは思わず自分につつこみを入れる。これは夢に似ているが、違う気がする。」こは夢とは全く異なる空間のように思つ。

(待つて、記憶が途切れてる。という事は、私の身に何かあった。現実世界で突然、こんな所に来るわけないから……)

「コーデュは冷静に冷静に考えて、そして、思いついた。

(あ、もしかして、死んじやつた？　なんてねー、なんて、なんて

……)

〔冗談のつもりで考えてみたが、あながちそうでないとも言い切れない。何せ、生きているという確証も無いのだから。現に、コーデュには自分の鼓動が聞こえなかつた。胸に手を当てても、首を押さえても、鼓動は感じられない。

(……ま、まさか……まだ何もやつてないわよ、私。まだ人生、ものすくなく途上よ。ここで死んだら、私の人生、ほんつと一に無駄。嘘よね、嘘と言つて)

「コーデュが思わず顔を青くしていると、

「大丈夫、ここは死じやないよ」と、声がかかつた。

驚いてコーデュが振り返ると、そこには少年が立つていた。

否、少年のシリエット、と言つべきか。虹色の光の線がそこにあら。髪の毛の先まで纖細に描き出された輪郭。少年の中も深い闇で、彼の動きだけが、ゆらゆらと光の軌跡で浮かび上がつている。

「やあ、コーデュ。僕はエルバ。安心して。ここは死じやないよ」

「……じゃあ、混沌かしら」

「どちらとも言えないなあ。僕も、こここの事は良く知らないんだ」エルバは明るく言つ。揺らめく体で、彼はコーデュを励ます。

「大丈夫だよ。きっと、彼らが助けに来てくれるから」

「彼らって、誰？」

「ほら、ずっと一緒に居たじゃない。お父さんは知らないみたいだ

けど、僕、判つてるんだ。彼ら、王子でしょ？ それも、アルキー
シユの。ずっとここで待つてたかいがあつたよ。僕はやつとここか
ら出れるんだ

「……どうして、王子だと判るの？ それに……ここから出れるつ
て……？」

「コーデュが尋ねると、エルバは言った。

「僕は、召喚獣の部品にされてるんだ。精神だけがここに取り残
される。コーデュもそうだよ。僕はここに漂いながら、一二個の
眼で世界を見るんだ。それできつと待つてたんだ」

「何を？」

「お父さんを、……ベイトリオンを、殺す人が来るのを」
エルバは嬉しそうな声をあげて、笑った。

ウェルとコルトは装備を整えて、翌朝、再度山に登つた。
あれからすぐに召喚術を始めたとしても、夕方までは完成しない
だろう。逆に、日暮れまでにコーデュを助けなければ、彼女は召喚
獣になつてしまつ。

相手は召喚師。それも、ロドッシュの大型召喚獣を作れる
人間だ。何も考えずに戦つても勝てる相手ではなかつた。

コルトは古風に「とレイピア、小さな盾を用意した。ウェルの方
は、小さな銃と大きな盾を。

そして。

「うむ。ルグネス、頑張つてゐなあ」

先行したルグネスは、偵察のフェロネスやルヴィエンを破壊して
いた。

今度しぐれればクビだと思っているのだろう。召喚獣相手には魔
術が有効である。多少心得のあるルグネスは、不慣れながらも魔術
を駆使し、露払いをしていた。ベイトリオンの小屋に着くまでに、
數十匹の残骸を見かける。が、ついにルグネス本人の姿は見えなか

つた。

「ベイトリオンとは戦うな、と忠告しておいたから、まあ上出来だな」

「彼も召喚師と戦うリスクは理解しているのでしょうか。あとは兄さんが死にかけた時に、庇いに来るか否かですね」

「そうだな、庇いに来るか否かだな」

コルト達はわざと大声で言いながら、ベイトリオンの住居へと近付いて行つた。例によつて、家には誰も居ない。前回と同じ東側の納屋を覗いたが、そちらも空っぽだつた。

となれば、残つた西の納屋。

二人は納屋に近付き、扉を開けた。

木の床に、大きく赤い魔法陣が書かれていた。その中央に大きな机があり、コーデュが寝かせられていた。

「コーデュ！」

コルトが思わず駆け寄るが、魔法陣からは何らかの結界が発生しているようだ。コルトはあと一步のところで、コーデュに触れられない。

「ダメですよ、邪魔をしては」

ベイトリオンの声がした。はつと二人が天井を見上げると、梁にベイトリオンが腰掛けている。そしてその隣に、異様な物が立つていた。

人の子供ほどの大きさで、背からは大きな蝙蝠の羽。胸から腹にかけて、一二もの青い眼が輝き、両腕からは鎌状になつた骨が生えている。顔は明らかに人間だ。

「リドルエル……」

ウェルが思わず唸つた。

リドルエルは人間を主体とした召喚獣だ。腕から生えた骨の鎌で命を刈る、空飛ぶ人。死神とも呼ばれている。

「山里に隠れて、人体実験を行つっていたとはね」

ウェルが言うと、ベイトリオンは肩をすくめる。

「実験とは悲しい。これは蘇生術ですよ。おかげで息子は、いつし
て今も元気に、私と苦楽を共にしてくれているのです。なあ……エルバ」

ベイトリオンはリドルエルを見て、言つた。

「さあ、エルバ。お客人に」挨拶を。山歩きにお疲れだらつから、
樂に殺して差し上げなさい」

リドルエルはゆづくらとばたき、そして急降下してきた。その
腕の骨でウヘルを難ぎ払う。

「つ！」

ウヘルは大盾で身を庇つたが、リドルエルのあまりの力に吹き飛
ばされ、納屋から転がり出る。

「ウヘル！ うわっ！」

ウヘルを助けに行こうとしたコルトは、水の腕が飛び出て来るの
を、すんでのところでかわした。見れば、ロドッショが一体、こち
らに歩いて来ている。

「私つて、つぐづく熊にもてるな」

コルトは思わず呟いて、弓に矢をつがえた。

「……どうして、お父さんを殺す人を……待つてるの？」

「コーデュが尋ねると、エルバは笑つて答えた。

「僕が終わるから。僕はもう死んでるんだ。だけどお父さんは、僕
をここに繋ぎとめてる。なのに、話を聞いてくれない。僕の声は届
かないんだ。もう僕には、どうしようもない。もう、樂になりたい。
お父さんにもね、樂になつて欲しい。もう、悲しまないでつて、言
いたいのに、伝わらないんだ」

エルバは小さく溜息を吐く。

「僕はお父さんを恨んでないよ、死ぬ事は怖くない。だから……お
父さんは、僕の分まで、生きてよつて、言いたいのに。……悲しい
事ばっかりじやないよつて言うのに、聞いてくれないんだ」

だから僕は、お父さんを殺す人を待つていたんだ。

エルバはそう言って、そして「コーデュ」に手を差し出した。

「さあ、コーデュ。出口に行こう。君なら大丈夫。僕とは違つて、
とっても力がある。君が強く念じれば、ここから出れるはずだ」

「でも……どこを見ても同じよ？ 出口なんて……」

「諦めちゃダメ。諦めると、出口は消えてしまうんだ。信じて歩き
続けないと、辿り着けないんだ」

エルバは「コーデュ」の手を握つて歩き始めた。「コーデュ」も仕方なく、
闇の中を歩いて行く。

闇は何処までも続く。本当に出口などあるんだろうか。「コーデュ」
は思わず疑つてしまふ。

「だめだ！」

エルバが叫んだ。しかし既に遅かつたようだ。「コーデュ」が顔を上
げると、エルバの姿は無い。

それどころか、先ほどまでよりも一層、闇は濃さを増し、纏わり
付いているように見える。

「エルバ……？」

名を呼んでみるが、返事は無い。辺りを見渡していると突然、人
影が現れた。

それは以前見た事のある人々だつた。

『ちくしょう、魔術が何だ、魔術で何が出来るつていうんだ』

何人もの人間が周りに突つ伏し、嘆いている。「コーデュ」はその光
景を知つていた。

魔術師を必要としない現代で、埋もれていた同族達だ。

世の中を、あるいは魔術そのものを憎み、恨み、そして結果的に
埋もれていった人々。

あらゆる変革を望まなかつた者達だつた。

『コーデュ、お前もこっちの人間だ』

一人の男が、「コーデュ」を見て言った。

『魔術師なんて、もう要らない。お前がどんなに夢見ても、そんな

時代は来ない。歩いても無駄だ。全ての魔術式は既に完成し、お前の切り開ける分野も無い』

『そうだ。第一、お前は魔術を志しながら、何をやっている。一般市民にまぎれて、働いて、金を儲けて。お前も私達と同じだ』

『ここにおいて、ここはとても気持ちがいいよ。もひ、夢に追いかけられる事がないんだ』

彼らはコーデュを手招く。コーデュは何か、目に見えない力で、そちらに引っ張られていく。

「嫌よ。私、まだ諦めたくないの」

『諦めは早いほうが多い。人生に響くからね。若いうちなら、どんな風にでも生きていけるが、それもあと何年続くか……』

『夢ばかり追いかけて、夢に追われるようになつては、もつ取り返しがつかない。ここに来なさい。ここは安全だ。苦痛も、強迫観念も、辛い事も、何もない』

そうして人々は「コーデュに手を伸ばす。

「コーデュ、だめだ！」

その手をかいくぐつて、白い手の輪郭が現れた。

「だつて、そこには夢も無いんだよ！」

コーデュは咄嗟にその白い手を掴んだ。瞬間、周りに居た全ての人々が消える。代わりに、目の前にエルバの輪郭が立つっていた。

「信じて。僕を信じて。コーデュを信じて。こんなトコで終わっちやダメだつて、頑張るんだ。立ち止まるのは簡単だけど、もう一度歩き出すのは、凄く力が要るから、頑張って」

「コーデュはその言葉に聞き覚えがあつた。

ふと思いついて、髪に刺したかんざしに触れる。

そうだ、フィリエにも同じ事を言われた。

こんな所で、まじついている場合じゃない。私は、夢を掴むんだ。

コーデュはそして、信じた。エルバを、自分を、出口がある事を。

「ルグネスーー！ もう一本、早く！」

林にコルトの声が響くと、何処からともなく、矢が空を切る。ドスツと音を立てて、矢が木に突き立つ。その矢には、紐で未使用の矢が数本、括り付けられている。

鎌に魔術を埋め込んだ矢だ。爆破矢と言つて、衝撃を『える』と爆発する特徴がある。

コルトは素早くその矢に駆け寄り、瞬時に爆破矢を取ると、構えた。目の前まで迫っていたロドッシュに矢を打ち込むと、ロドッシュは水を蒼き散らしながら地面に崩れた。

「ふう、まさか一〇発も要るとは」

コルトはあらかじめ特殊な矢を何本か用意していた。召喚獣には魔術が有効だが、コルトにもウェルにもその心得は無い。唯一、ルグネスに多少有る。彼には支給係を命じていた。物陰でルグネスが鎌に魔術を埋め込み、コルトに渡す。

コルトは爆破矢を五本打ち込み一頭目を、そして先ほど二頭目を倒した。

しかし、休んでいる暇は無かつた。

近くではウェルが大盾で攻撃を防ぎながら、リドルエルに銃弾を撃ち込んでいる。が、高等召喚獣のリドルエルには、銃の攻撃も殆ど効いていないようだ。

「ウェル！」

コルトもウェルの側に寄り、矢を放つ。リドルエルに矢が当たり、爆発が起こる。が、リドルエルは気にして様子も無く滑空し、コルト達を鎌でなぎ払つ。

「うわあっ！」

二人は盾ごと吹き飛ばされ、一本の木に叩きつけられた。背骨がぎしりと痛み、呼吸が一時的に止まる。

「ははは、エルバ。いいぞ」

ベイトリオンはそんな様子を見ながら笑つて言つた。

「流石は私の息子だ。素晴らしい」

そう言つてリドルエルを呼び戻すベイトリオンに、ウェルは起き上がりながら言つ。

「どこまでも愚かな人だ。それはもう、貴方の息子などではない」

「なんだと？」

その言葉に、ベイトリオンはピクリと顔を引きつらせる。

「貴方も召喚師なら判つてゐるはずだ。一度術の完成した材料は、もうその原型や主体を留めていない。それはもう、リドルエルという召喚獣であつて、貴方の息子ではない」

「黙れ！　お前に何が判る！」

ベイトリオンが怒鳴る。

「お前は金が有れば何でも出来ると、そう言つていたな。だが、私には何も出来なかつた。金は有つたが、誰も息子を助けてくれなかつた。私が召喚師で、エルバがその子だつたからだ！　私はこの世を滅ぼしてやるぞ。幸い、とても良い材料が手に入った。あれを使えば、エルディーレが召喚できる！」

エルディーレ。

それは炎を纏つた神の名である。無論、召喚されるのは神ではない。炎を自在に操り、全てを焼き尽くす力を持つた人間だ。それは禁術として抹消されたものだつた。

高位な魔術師を主体とする召喚術だ。その材料に、シュレグ一族の末裔であるコーデュは最適だろう。ベイトリオンはコーデュのピアスに気付いていたのだ。そして、彼女を手に入れた。

「この世を焼き尽くして、そしてもう一度、魔術師の時代を取り戻す！　魔術を使えぬ凡人どもは、また我らの脅威に怯えて暮らせばいいのだ！」

ベイトリオンが高らかに笑う。それを見ながら、ウェルは静かに言つた。

「……君の愚は、實に多いが、そのうち大きな物を三三つ挙げよう」

「何？」

「一つ目は、自らの不明を理不尽と名付け、美化した事。君は魔術

師として迫害されたかもしだいが、それは平民と近付く努力によつて、埋められたかもしれない。君が意固地に、今は無い名誉に縋つたが故、自ら逃げ道を失つた可能性は、大いにある

「なんだと……！」

ベイトリオンは怒りに震えるが、ウェルは気にした様子も無く、言葉を紡ぐ。

「一つ目は、未来ある魔術師を、……君の希望となるだらう新星を、そのくだらない私怨のために使おうとした事。コーデュは魔術師としてこの世に再び、旧来とは違う形で貢献する事を望んでいた。そんな夢を持った同族を、過去に縛られた貴方が使おうとするなど、皮肉以外の何者でもない」

「貴様……言わせておけば！」

ベイトリオンは大きく手を払つ。それを見て、リドルエルがはばたく。

「三つ目は、君の魔術師としての愚

「黙れ！ エルバ、そいつらを殺せ！」

リドルエルは咆哮を上げ、ウェルとコルトに向かつて急降下する。

「我らアルキー・シユの血への恐怖を忘れたる魔術師、まさに愚の骨頂！」

ウェルはそう叫び、コルトに手を向けた。コルトもまた、ウェルに手を向ける。彼らの手の平には、赤い紋章が浮かび上がっている。三匹の龍が、互いに絡みつき、円を描く紋章。アルキー・シユの国旗、グランディール。

「我等が交わした、天と地と海の盟約を知れ！」

「大いなる天よ、ふくよかなる地よ、淀みなき海よ、我が名に応えよ！」

一人の声に呼応して、大地にグランディールの赤い紋が浮かび上がる。しかし、詠唱は間に合わない。リドルエルはウェルとコルトに再接近し、その鎌でなぎ払おうとする。

と、その時、突然茂みから人影が飛び出し、リドルエルを押し倒

した。

ルグネスのようだつた。彼はリドルエルを地面に押し付け、時間を稼ぐ。わずかな隙だつたが、その時間で、術は完成した。

「我らが名はアルキー・シユ！」

「汝の力を示せ、偉大なる龍、グランティール！」

そして、辺りは白い光に包まれた。

「な……っ」

ベイトリオンは驚愕に目を見開いた。白い光は、ベイトリオンの召喚獣を粉々に打ち碎く。リドルエルは黒い文字へと変化し、霧散する。その後に、彼の愛した少年の体が、力なく横たわる。そして光はベイトリオンをも包む。彼は一瞬死を覚悟したが、その感覚にハツとして己の手を見る。

魔力が、消えていく。

体中の血液が、流れ出るように。ベイトリオンの体から、魔力が

ほとばしり、そして消滅していく。

「まさか、魔術師殺し……まだ、アルキー・シユの血に残っていたといつのか……」

驚愕するベイトリオンをよそに、光はやがて消える。ベイトリオンの体から魔力は完全に無くなつていた。

呆然とするベイトリオンの目の前には、二人の青年。

そして、パリン、と軽い音を立てて、ベイトリオンの背後で結界の割れる音がした。

「さあ、コーデュ」

ウヘルはベイトリオンのむらこに向こうを見て、言った。

「その愚者に、君の夢と、意思と、力を見せてやるんだ」

ベイトリオンはその言葉に振り返る。

そこには、手を振りかざした、コーデュが立つていて。

そしてその手が下りた時、辺りは赤い光に包まれた。

9 もう一つの旅立ち

「じつ、じつだ。出口だよ、コーデュ！」

長い時間を走り続けて、ようやく出口ひじい物が見えた。
それは、真っ白な穴だった。

「ここから出て、元の世界に戻つて。そして、忘れないで。信じて、歩き続ける事を」

「エルバは？ どうするの？」

「僕は、ここよりも先で、お母さんと一緒にお父さんを待つ。
そこからなら、お父さんに声が届く気がするんだ」「
お父さんに、僕の事は気にしないで、頑張つてって、伝えて。
エルバはそう言つと、その輪郭さえ消してしまった。しばらくH
ルバの名を呼んだが、彼はもう現れなかつた。

「コーデュは静かに目の前の穴をくぐり、外に出る。
すると、耳に声が届いた。

「君の夢と、意思と、力を見せてやるんだ」
ウヘルの声だ。

「コーデュは漠然とそう思つた。そして、その言葉の意味を考えた。
なら、私の全てを見せよ。」

「コーデュは脳裏で魔術式を開拓した。それは、彼女の作り出した、
最も複雑な魔術。

「ラウ・ディ・オール」と名付けた魔法。

発動させると、それは周囲を光で包み込んだ。炎のような、赤い
光。

その光を受けた、ベイトリオンの恐怖に歪んだ顔を見て、コーデ
ュは思わず表情を崩し、笑ってしまった。

その裏山には、何もない。

雑木林や杉林が続くと、だだつ広い空き地が広がっている。

そこに、四人が居た。

ベイトリオンは拘束され、座っている。コルトとウェルは地面に座り、コーデュは彼らに包帯を巻いている。

「しかし、何だか判らないけど。コーデュの魔法が発動した時には、死ぬかと思った」

ウェルが呟くと、コルトも頷いた。コーデュは苦笑して言つ。
「思いつきり派手な外見にしちゃったからね。こけおどしだもの」「こけおどしと言うには、凄すぎる。何せ、射程範囲内の動物以外の物が消滅してる」

ウェルが辺りを見渡しながら言つた。

コーデュの発動した「ラウ・ディ・オール」は、標的を絞つた最高位攻撃魔法だ。

その標的とは、動物以外の物。建物、植物、皆消滅するが、命のある動物とその付属物だけは、何の害も受けない。

建築物の解体などに役立つか、とコーデュが独自に開発した魔術式だったが、使う機会が無かつたので、今回が初めての起動だったという。

もし式が間違つていたら、全部消滅してたけどね、とコーデュはあっけらかんと言つ。

「そんな事になつたら、僕らはもう一度グランディールを使わなきゃいけなかつたかもしれない」

「そうだな……あんなしんどいのも、もういいぞ」

ウェルも「ルトも、少しやつれた様子だった。

「そういえば、貴方達、何したの？」

すごく疲れてるけど。コーデュが尋ねると、コルトは頷いて答えた。

「シユレグ一門を打ち倒した四人の戦士は、各々が特殊な力を使って、彼らに挑んだ。私達の先祖アルキーシュは、グランディール……天と地と海に宿る三匹の龍と契約したと言われている」

「ああ……なんとなく、聞いた事あるかも」

「実際に契約したかどうかはさておき、私達アルキーシュ家のの人間は、皆その血筋の力として、グランディールの発動権がある。グランディールの力は……魔術の封印だ」

「……封印」

「そう。アルキーシュはこの力で、まずシュレグ一族の力を無効化したと伝えられている。……で、その力は、私達も持っているのだが……」

「世代が進むに連れて、血の力が弱くなってしまったんだ。契約は続いているんだけど、僕らぐらいになると、一人一組で全力を出さないと、グランディールが発動出来ない」

「にしても、こんなに辛いとは思わなかつたよ……」

ウェルは珍しく表情を曇らせて、うなだれています。よほどの体力を消耗したのだろう。なにせ、元々彼らは魔術師ではない。魔力無しで魔術を使えば、命を削る事になる。それほどの力だ。一人で負担する分、まだ軽いのだろうが、一人では使えないのだろう。

それでコーデュはやつと、ウェルが三人目にコルトを選んだ理由が判つた。こういう時のために、一緒に行動していたのだ。最も、こんなに早く使う事になるとは思わなかつただろうが。

「それより、ルグネス君は、大丈夫ですか」

リドルエルに掴みかかるなんて、たいした根性ですが。

ウェルが尋ねると、コルトは頷いて言つた。

「まあ、あの短時間でまた物陰に隠れてるから、大丈夫なんだろう。頼りになる」

満足そうなコルトの言葉に、コーデュは僅かに笑む。やはり、彼の「良い」という勘は正しいのだろう。聞く所によれば、ルグネスは殺傷用の召喚獣を押し倒したらしい。主のためとはいえ、そんな恐ろしい事はよほど相手を思つていないと出来ないはずだ。

これでルグネスがクビになる事は当分無いだろう。コーデュがそんな事を考えていると、

「……何故、殺さない」

ベイトリオンが呟いた。

魔術師としての力を封印され、息子の死を完全に決定付けられた今、ベイトリオンは失意のどん底に居た。しかも、最後の召喚術は失敗し、家も無い。

何もかも無くなつたといつのに、まだ生きなければならないのか。

ベイトリオンの言葉に、ウェルは肩をすくめて言った。

「犯罪者には、なりたくないですし」

「……」

「それに、魔術師として殺したのだから、そこに残つた貴方は、僕らの敵だつたベイトリオンじゃない、つて事で」

ウェルは言うが、ベイトリオンは首を振る。

「愛する息子の体も、家も、魔術も。恨む術さえ無くなつた。生きていても、広がるのは絶望の海だけだ。殺してくれ

「嫌です」

「頼む」

「お断りします」

ウェルはきつぱりと言つて、それから、諭すように言った。

「この先に絶望の海しか広がつていらないなら、諦めるより、船出する事を勧めますがね。……はい、これ

「？」

ベイトリオンは膝に袋を置かれて、首を傾げた。中からは金貨が覗いている。

「ローデコを貸したのは一日でしたので、これだけ返金します」

「一日分は貰うのか、弟よ」

コルトのつこみを無視して、ウェルは言った。

「希望が無いとお思いなら、作るがいいでしょう。僕らがそうのよ、貴方もまた、何一つ始めてはいけない。失う物はもう、一つもないのです。それは喜ぶべき事でもある。……貴方さえ興味があれば、ここに行つてみると」

ウヘルはベイトリオンの拘束を解くと、一枚のパンフレットを差し出した。

そこにはウェルエッショ共同学園と書いてある。

「いい所ですよ、たぶん」

ウヘルはそう言って、そして山を降り始めた。コルトもそれを追う。

いつまでも動かないベイトリオンに、コーデュは声をかけた。

「何処かで、エルバという少年に会いました」

「……！」

ベイトリオンは驚いた顔でコーデュを見る。

「僕の事は気にしないでくれ、頑張つて、生きててくれつて……伝え
るように、言わされました……お父さんに、と」

「……」

コーデュはそれだけ言つと、ウヘル達の後を追つた。

「ルグネス君、怪我は無かつたですか」「
帰りの道。ふいに物陰に入つて、そして出てきたコルトにウヘル
が尋ねる。

「ああ、大丈夫みたいだ」

「見た目より、タフですね」

「でなければ護衛は勤まらない」

そんな会話にコーデュは入つていけない。コーデュはルグネスの外見を見ていないからだ。

「……その人、どんな外見なの？」

「そうだなあ。黒い髪で……コーデュとそんなに変わらない体格で
すよね」

「うむ……」

「あら。じゃあ、結構華奢ね。女の子でもおかしくない感じ」

「……」

「——テュの言葉にコルトは一瞬顔を顰めて、

「……確認した事は無いが、……」

と曖昧に呟いた。そしてしきりに首を傾げる。

「……いや、いや、まさかな……もう一〇年以上、過いじてゐしな
……いや、うん、いやいや」

独り言を呟き続けるコルトを後日に、コーテュは今度はウェルに尋ねる。

「それにウェル。どうしてコルトの事、兄さんとか呼んでるの?」

「まあ、成行きで……」

「あと……私を貸したお金って、何の事?」

「……」

「ウェル?」

「——テュが顔を覗き込んで尋ねると、ウェルは気まずそうに顔を反らした。それを見て、面白そうにコルトが呟つ。

「この守銭奴は、君をベイトリオンに売ったんだ」

「まあ」

「——テュはわざとらしく驚いて、そして怒った顔を作つて言った。
「ウェルって、本当に酷い人」

「……」

「——、ウェル。言う事があるだら、ほら」

コルトがウェルを突くと、彼はちらつとコーテュを見て、立ち止まる。コルトもコーテュも立ち止まって、ウェルの行動を見守つた。ウェルはしばらく言い淀んでいたが、やがて、

「……すまなかつた」

と、極小さな声で言った。

「一時的とはいえ、仲間である君を、敵に売つた。仕方が無かつた
が……兄さんに言わせると、非人道らしい」

「じゃあウェルはやっぱり、悪いと思ってないんじゃないの?」

「う……」

「ひどい」

「コーデュはぱいと向こうつを向いてしまった。コルトは腹を抱えて
プルプル震えている。よほどおかしいらしい。
ウェルは頭をかいして、そして、言つた。

「僕は、お金や合理的な事しか考えていない、守銭奴だ。だから、
だから、確かに、悪いと本当に思つてゐわけじゃない……でも、
……その」

ウェルは一度空を仰いで、そして。

「その、僕に欠けている物を、教えて欲しい……僕と、プライスレス
スを探す旅を、続けてくれないか。コーデュ」

言い切つて、ウェルはまた俯いた。そんなウェルに振り返り、コ
ーデュは笑つて言つた。

「いいわ。一緒に行きましょ。三人で仲良く。いいじゃない、欠け
てる所を補い合つて。グランティールみたいね、私達つて
無表情のはずのコーデュが、おかしそうに、笑んでいた。

「……コーデュ、なんだか変わつたね」

「そうかしら?」

「うん、……でも、そんな君も嫌いじゃない」

「そうさ、コーデュ。君は君であれば、私の妻だ!」

そして当然の如くコルトの発言内容は無視しながら、彼らは山を
降りて行つた。

終わりの前に

銀髪の少女が一人、ベンチに腰掛けっていた。

彼女は恐れていた。それは恐怖という程、強い物ではない。叱責に怯える、幼児が抱く物だ。彼女は長い間、ある視線とその主から、逃げていた。

そしてその田も、彼女は隠れていた。

アルキーシュ王国の王都クレシュ。その中央に広がる、優美な宮殿ロンドリア。その一角にある、大規模な花畠。宮殿を囲う高い壁までの間を埋め尽くす、色とりどりの花の中に、少女は居た。

というのも、少女が逃げている相手は、花よりも金に興味があるからだ。ここまで探しに来ないだろ？、と踏んで、少女はそこでくつろいでいた。

ひさしのついたベンチに座り、柔らかな風に揺れる七色を見つめる。

今日はさる王女の誕生会。彼女は王族の親類として招待された。定められた挨拶や出し物は終わり、自由に食事となるや否や、彼女は会場から逃げ出した。夕方には解散になる。それまで、逃げおせればいい。

暖かな日差しが、辺りを優しく包んでいた。空気から春を感じられた。

僅かに届く花の香りに、うつとりと目を閉じる。そして彼女は、静かに眠りの世界に入ろうとしていた。

と。

「イヴェリア」

声をかけられて、少女……イヴェリアは、飛び上がるほど驚く。見ると、一人の少年が立っていた。イヴェリアと同じ銀髪に、赤い瞳。歳にしては表情に欠けた、老成した雰囲気さえある、のっぺりした顔立ちの少年。

「……ウェルエッシュ様」

イヴェリアは名を呼び、そして俯いた。捕まってしまったのだ。

「ウェルでいいって言うのに。従姉妹なんだから」

「仮にも王位継承権を持つ人でしょう？ 私みたいな平民には、呼び捨てなんて……」

「なら、ウェル様でもいいよ。僕はウェルエッシュって名前、気に入つてないんだ」

ウェル、まだならないんだけど。少年……ウェルはそう言つと、イヴェリアの顔を覗き込んでくる。イヴェリアは目を反らすが、ウェルはそれを追う。

「イヴェリア。どうして僕を避けるんだ」

「避けてなんか……」

「じゃあ、どうして目を合わせてくれないんだ。お互い、性別を気にする年齢にはまだ早い。……何か、後ろめたい事でも？」

ウェルが問うと、イヴェリアは恐る恐る彼の目を見た。ウェルはいつも觀察眼が鋭い。黙っていても、見られているだけで、全てがバレてしまいそうだつた。

「……ウェル様」

「何だい、イヴェリア。言つてくれ。その方が、案外上手くいくかもしねないよ」

ウェルの言葉にイヴェリアは決心し、そして言つた。

「ウェル様は、私に、お金を下さったでしょ？」

「ああ、うん。それが？」

「……使い切つてしまつたんですね」

「……全部？」

「はい……」

「……あんなに、有つたのに？」

「……はい……」

イヴェリアが小さく頷くと、ウェルは静かに溜息を吐いた。イヴ

エリアはたまらず、目を閉じた。

イヴェリアは王子であるウェルの従姉妹だ。

元々ウェル達の家系は平民なので、当然、ウェルとイヴェリアでは生活水準に格差が生じた。イヴェリアは出生の不公平さを感じ、ウェルの事を嫌うようになつた。そんなイヴェリアに、ウェルは王族給付金の一部を譲渡し、関係の修復を願つた。

イヴェリアとその母は喜び、ウェル親子との交友を改善し、貧しい生活からの脱却を試みた。が、

「気付いたら、お金が無かつたんです」

イヴェリアは呟いた。

「最初は盗まれたのかと思つたけど、良く考えたら判つて。あのお金、全部、服や、お母さんの肌や、おいしいご飯に変わっちゃつて……。私達、あつという間に全部使つちゃつた……」

「……」

「学校では、お金の使い方とか、教えてもらえなかつたし……やっぱり、貧乏人は、貧乏人つて事なんでしょうね」

「……それで、もうお金はいらないのかい？」

「欲しいですよ。欲しくないわけないです。でも……ウェル様に、申し訳無くて」

「僕の事はいい。どうせあの金は元々、僕の物じゃないし。本当に大事なのは、今回の事を踏まえて、僕と君がこれからどうするかだ」「これから……？」

「うん」

イヴェリアが不思議そうに首を傾げる。ウェルはしばらく考えて、イヴェリアに言った。

「そうだ、イヴェリア。もし僕に申し訳ないと思つていてるんなら、僕の計画に協力してくれないか」

「計画、ですか？」

「イヴェリア。今回、君にお金をあげて良く判つたんだけど、人はいくらお金が有つても、その正しい使い方を知らないと、無いのと

同じなんだ

「……そう、ですね」

「だから、僕はまず、学校を作ろうと思つ」

「学校？」

イヴェリアが首を傾げると、ウェルは「うん」と頷く。

「授業料の要らない学校。皆、知りたい事を好きだけ勉強している。君達が普通の学校で教わる事以外にも、たくさん知らなきゃいけない事がある。それを教える所。誰もが経済や、帝王学や……、そう、一見必要無さそうな事も、実は皆、知らなきやいけないのかかもしれない。色々な事を学んで、成長して。それから世の中に出なければいけないんだ」

「……」

イヴェリアは何も言えなかつた。ウェルの言つ事は、いつも突拍子が無くて、判りにくい。

けれどイヴェリアは、彼の言葉に信頼を寄せていた。現にイヴェリア当人が、金を失つているのだから。

「イヴェリア。もし君が反省していく、僕に協力してくれるなら。

君に、そこの管理人をして欲しいんだ。給金は払うから」

そしてイヴェリアは、その提案を断れなかつた。

否。

出生の不公平さ。それに甘えていた自分を認識した。そして、変わろううと思つたのだ。

グランディールは、天と地と海を司る、三匹の龍。その全ての尾は、一つに繋がり、青い宝石を輝かせている。

はためぐ国旗を見上げて、ベイトリオンは溜息を吐いた。
手には、ウェルの渡したパンフレット。

王都クレシュの、石畳の大街道を大きく外れた、未開発地。

山の麓の、湖と、それを囲む農場。そしてそこに佇む、大きな建築物。飾り気の無い石造りの学園…… ウェルエッシュ共同学園、と、看板には書かれている。

行く当ても無いとはいへ、今更、学園などに用は無いはずだが……。

ベイトリオンは溜息を吐いて、そして踵を返そうとした。
と、

「あら」

と声。振り返ると、一人の女性が立っていた。

銀の癖のある髪を結い上げた、妙齢の女性。眼鏡をかけていて、理知的な顔をしてはいるが、どこか雰囲気が柔らかい。服装が顔に似合ない、年配向けのワンピースだからかもしだれない。

「お客様？ それとも、新しい生徒さんかしら？」

彼女はそう言って、ベイトリオンに歩み寄つてくる。

「いや、私は……」

ベイトリオンは首を振るが、彼女はその手にあるパンフレットを見つけて、頷く。

「ああ、ウェル様に会つたんですね。そのパンフレットは、ここに入学するのに必要なんですよ」

彼女はにっこりと笑んで言った。

「ようこそ、ウェルエッシュ共同学園へ。私は、支配人のイヴェリアです。…… ウェル様から、ここへの説明はありましたか？」

「いや……」

「やっぱり。ウェル様は自分で学校を作つておいて、説明したがらないんですよ。面倒だつて。結局私が、全部しなきゃいけないんです。酷いでしょう」

ウェル様と私、従姉妹だから、まあ許してあげるんですけど。イヴェリアはそう言って笑う。

そういえば、髪の色や質、瞳の色がウェルと同じだ。賢そつだが、

ウェルと違つて鼻にかけたような様子は無い。

「じゃあとりあえず、簡単に説明しますね。ここはウェル様の作った学校です。老若男女、人種、職種に関わらず、誰でも入学できます。……あ、そのパンフレットを持つている人に限つて、ですけど。ここでは好きな学習を、好きなだけして結構です。寮や食堂も完備しているので、ここで暮らす事も出来ますよ」

「……学習？ しかし、私は見ての通り、歳で……」

「あら。勉強をするのに、年齢は関係ありませんよ。人生はそれのものが、勉強の連続だと、ウェル様も言つてますしね」

「……」

ベイトリオンは困つたように、辺りを見渡した。

学園の敷地内では、小さな子供が遊んでいる。それを、老人が見守つていた。彼らも生徒だとしたら、イヴェリアの言つている事は、本当なのだろう。

「……しかし、金が……」

「入学金を含め、料金は要りませんよ」

「……運営は成立しているのですか」

「私達管理部が、資産運用して賄つていますから。中には、ここで学んだ事を実行して、それで儲けたお金を寄付して下さる人も居ますけど……原則として、お金は取りません。変わりに、他の物を」

「他の、物」

「貴方が、誰かに、何かを『与える』事。それが条件です」

「……何かを、『与える』？」

「はい。知識の共有、というものです。もちろん、お金や物でもかもいませんが……話は、タダですものね。皆さん、語る事を選びます」

ベイトリオンは苦笑して言つた。

「なら、私はここに入れない。私は『語られる』ような事も、『与えられる』ような事も無いからね」

「あら、私はそうは思いませんけど」

イヴェリアは微笑んで言った。

「例え、貴方が些細だと思っている事でも、他の人にはとても重要な事もありますよ。それに、今生きているという事は、それだけで素晴らしい事です。……良かつたら、貴方のお話を聞かせてもらえないせんか？」

「……しかし私には、面白い話など何も……」

「貴方の事が知りたいんです。貴方が今、ここにいる。それはそれで、素晴らしい事ですもの。私に、貴方との時間を与えてくれませんか？」

「……」

イヴェリアの真摯な眼に、ベイトリオンは思わず俯いた。
誰かにこうして求められた事など、殆ど無い。

話をしてくれ、とせがまれるなど、一体、何年ぶりの事だろうか。
『ねえ、お父さん。お話を聞かせてよ。僕、お父さんやお母さんの事が知りたいんだ』

そう言つてくれた我が子は、もうここには居ない。
けれど。

ふと顔を上げると、子供達が焚き火をしようとしているのが見えた。

生木に火をつけるのには、大変な技術が必要だ。

子供達は煙に涙を流しながらも、懸命に火を起こそうとしている。
それを見かねて、老人が近付き、木の積み方を変えてやる。
そうすると、煙は減り、やがて小さな火が起こる。子供達は喜んで、老人にもつと何かを教えるように、せがみはじめる。

「……」

その様子を見て、ベイトリオンは、小さく頷いて、イヴェリアを見た。

「……私は、ベイトリオン・クレッセル……呪喚師の子として生まれた」

ある日の朝。ロキシーヌ村のはずれ、ボルタ工房。

「コーデュとウェルが出て行つてからも、盛況とは言えないが、静かに商売を続けていたフィリエは、その日も開店の準備に追わっていた。

幕で玄関を掃き、ショーウィンドウを丁寧に磨く。製品を並べ、価格表を置く。近頃はオーダーメイドも受け付け、リピーターは少しづつ増えてきていた。

「あの子達、元気にしてるかねえ」

それでも時々は、あの時の盛況を思い出す。その度にフィリエは苦笑した。

あれほどの才能を持つ人間が、自分のよつな妥協した者の側に、いつまでも居るはずがないのに。

いつか本当に帰つて来たりしたら嬉しいけど、それはそれで悲しい事だしね。

フィリエはそんな事を考えながら、商品を磨いていた。

「あの、求人を見たんですけど」

店に男が入つて來た。年は一五、六といつたところだろうか。亞麻色の髪の、穏やかそうな顔をした青年だった。

「……求人？」

「あの、魔術師募集中って……」

「あー。そういえば、解約してなかつたわ」

貼り付けていきなり來たコーデュに、フィリエは求人広告を貼つた事さえ忘れていたようだ。その言葉に、青年は驚く。

「えつ、じゃあもう、受け付けてないんですか？」

「まあ、今は居ないけどね……君、魔術師？」

「あ、はい……その、未熟ですけど……」

「……どうしたものかねえ。別に今のままで構わないっちゃ構わ

ないんだけど……」

フィリエが悩んでいると、青年は必死に頭を下げて言った。

「お、お願いします、雇つて下さい！ 僕、ここを断られたら、ホントにもう行く当ても無いし……それに、僕、ここの作品がとても気に入つていて。ほら、おでこに広告の人気が宣伝していたでしょう？」

「ああ、ちょっと前にね」

「あの時に、僕もこここの商品を買わせてもらつて……僕、落ちこぼれだから、もう魔術の道なんて諦めようと思つてたけど……こここの商品を見ると、もう一度頑張ろうって、そんな気になつて、ええと、だから、ここで働きたいって思つて……」

「……へえ。落ちこぼれなの？」

「詠唱速度が、その……下の下で」

「……思いつきり遅いのね」

「はい……」

フィリエは一つ溜息を吐いて、そして言った。

「いいわ。職人なんて、じっくり時間をかけてなんぼだからね。雇つてあげよう。その代わり、あんたもここが終着点だなんて思うんじゃないよ。いつかここを出て、夢を叶えるんだからね」

「いいんですか！ ありがとうございます！ 僕、ロイって言います。よろしくお願ひします！」

そう頭を下げるロイに、フィリエは自分の過去の姿を見る思いだった。

魔術師の姉に憧れ、魔術を学び、そして何事も成せなかつた自分。それは時代背景や、実力や、そして支援者の有無で変わつたかもしれない。

夢を叶えられる人間は少ない。が、夢を持つ人々を助ける事は、やううと思えば出来るかも知れない。

フィリエは苦笑して、ロイを奥に案内し、製作の手引きを渡した。

「親愛なる、カティーナへ

元気ですか？

手紙の最初で聞かれても、返事する時にはすれ違つから、意味無いですね。

でも、気になるので尋ねておきます。元気ですか？ 生活は、順調ですか？

私の方は、何だか良く判らない事になつています。一四回目の就職、上手くいってたんですけど。ひょんな事から、冒険者と一緒に、ウロウロする事になつてます。

でも、楽しいです。なんだか、今まで知らなかつた事が、いっぱいついて。

住所が確定したら、また連絡します。それまでは一方通行ですね。

そちらの方……魔術運動型工作機械の開発は、上手くいっていますか。危なそうな名前だし、怪我とか、体には氣をつけて下さいね。

私のほうはもう、色々な意味で元気です。なんというか、毎日変な二人に振り回されて、大変です。でも、やっぱりそれは楽しいところもある

「コーデュ、そろそろ出発しよう」

ウヘルの声に、「コーデュは慌てて手紙を隠した。

村の本屋に立ち寄り、地図を買って来ると言つたウエルが、なかなか出てこない。その間、コーデュは手紙をしたためていたのだ。

「地図は有つたの？」

「一デュはトランクに手紙を押し込んで尋ねる。ウェルはその手紙については言及せず、頷いた。

「ついでだから、大陸地図にしておいた」

「げ……高いんじゃないの？」

「良い物は、いくら金を出しても買え。職人の鉄則だそうだよ。ま、広告を打つからって、多少まけてもらつたけどね」

ウェルはそう言つて、一冊の地図を見せた。地図といふよりは辞書だ。それだけでコルトぐらいなら殺せそうな厚さだった。

「さ、これで何処へでも行けるね……兄さんを呼んでくれる？」

「ああ、はいはい。……コルト、いつまでもやうしてないで、こっち来なさいよ」

「一デュが呼ぶと、物陰に入つっていたコルトがのつそりと出でくる。

「どうだつた？」

「教えてくれない……」

「教えない辺りが、なおさら怪しいわね」

「うん……」

どうやら、ルグネスの性別の事でコルトは悩んでいたようだつた。が、しばらくすると、コルトは首を振つて言つた。

「まあ、いい。ルグネスはルグネスだ。男だろうが、女だろうが。良いものは良いからな」

秋風は、少しづつだが、冬を呼んでいる。

コルトの格好に違和感が無くなり始める。三人は、冬を前に服を買い替え、さらに西へと旅立つ。

「これからどうするの、ウェル」

「うーん。行く当では無いからね」

ウェルが呟くと、コルトが言つた。

「そういえばルグネスが、海に出て魚を釣つてみたいとか、捌いて

みたいとか言つていたな」

「海？ 私、海つて見た事が無いわ」

「じゃあ、西の果てまで行つてみようか」

「ウールが言つと、コルトが笑つて言つ。

「西の果て、といふと、大陸から船出か？ まつすぐ西に行くと、この大陸の東に着くといふ話だぞ。確かめてみるか？」

「一生かかりますよ」

「それもそうだな」

「じゃあ、大陸を一周するつてこいつのはじづつ、どひせ、目的地は無いんだし」

「そうだね。夢はどこに転がっているか判らないし……」

「ウールが頷いて言つ。

「ここの三人…… + で、夢を探す旅に、こぞ再出発と行こう」

「ええ」

「うむ。ついでに、式場も探さねばならないしな！」
そして三人と護衛は、西へ向かつて歩き始めた。

立ち止まるのは容易だが、もう一度歩き出す事は難しい。
ならば、歩き続けるしかない。

彼らの旅は、まだ、始まつたばかりである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0687c/>

グランディール

2010年10月8日14時50分発行